

2.7 水生生物調査

2.7.1 調査実施日

水生生物調査の調査実施日を表 2.31に示す。調査は各季節 1 回、計 4 回実施した。

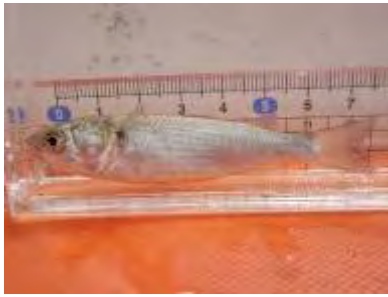
なお春季調査は、川崎河川漁業協同組合の同意協議の結果、7月に実施した。

表 2.31 水生生物調査実施日

項目	季節	実施日
魚類	春季	平成 21 年 7 月 17 日
	夏季	平成 21 年 8 月 21 日
	秋季	平成 21 年 11 月 20 日
	冬季	平成 22 年 2 月 12 日
底生生物	春季	平成 21 年 7 月 17 日
	夏季	平成 21 年 8 月 21 日
	秋季	平成 21 年 11 月 3 日
	冬季	平成 22 年 2 月 12 日

優占種

○ボラ (*Mugil cephalus cephalus*) [ボラ科]



分布：全国各地

全長：60cm

特徴：成魚は内湾など沿岸の浅いところに生息している。外海で産卵し、孵化した仔魚は3cm程度に成長すると群れをなして沿岸、河口域に侵入してくる。成魚は付着珪藻やデトリタス（生物の死骸や排泄物を由来とする微細な有機物）を食べる。いわゆる出世魚で、成長段階でハク→オボコ→イナ→ボラ→トドと呼び方が変わる。卵巣からカラスミが製造される。

○ビリンゴ (*Gymnogobius breunigii*) [ハゼ科]



分布：北海道、本州、四国、九州

全長：約5cm

特徴：川の感潮域や汽水湖の泥底から砂泥底のところに生息する。底生動物を食べる。

○マハゼ (*Acanthogobius flavimanus*) [ハゼ科]



分布：北海道～種子島

全長：約13～25cm

特徴：川の汽水域や内湾に生息し、夏には多数の未成魚が河口の干潟や河川下流域にも侵入する。砂泥底に生息し、主にゴカイ類を食べるが、小魚や藻類も食べる。

○マサゴハゼ (*Pseudogobius masago*) [ハゼ科]



分布：宮城県以南～沖縄島

全長：約3cm

特徴：河口の汽水域に生息するが、希に淡水域にも侵入する。泥底を好む。人為的な環境の変化に弱く、汚染が進むとすぐ姿を消す。雑食性。

2)底生生物調査結果

水生生物調査結果のうち、底生生物調査結果を表 2.33に示す。

底生生物調査で確認された種は、4季合わせて4門6綱13目23科38種であった。

季節別に確認種数が最も多かったのは、30種が確認された夏季であった。また地点別では、31種が確認された干潟植生無（下流部）が最も多く、次いで干潟植生有（下流部）、干潟植生無（上流部）と続いた。

また干潟植生有と干潟植生無では優占していたのは甲殻類がほとんどであり、チゴガニ、コメツキガニ、ヤマトオサガニ、クロベンケイガニ、タカノケフサイソガニなどが多く確認された。以下にこれらの種の概要を述べる。

表 2.33 水生生物調査結果 (底生生物)

調査年月日： 春季 平成21年7月17日
 夏季 平成21年8月21日
 秋季 平成21年11月3日
 冬季 平成21年2月12日
 調査方法： タモ網

番号	門名	綱名	目名	科名	種名	季節別		干潟植生有				干潟植生無													
								下流部		上流部		下流部		上流部											
						春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬				
1	紐形動物	-	-	-	紐形動物門の一種	●																			
2	軟体動物	腹足	盤足	カワザンショウガイ	クリイロカワザンショウガイ			●																	
3					ヨシダカワザンショウガイ	●		●																	
4					カワザンショウガイ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
5					ムシヤドリカワザンショウガイ	●		●			●	●						●							
6					カワザンショウガイ科の一種	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
7					ミズゴマツボ	ウミゴマツボ	●											●							
8					二枚貝	基眼	サカマキガイ	サカマキガイ	●						●										
9					イガイ	イガイ	イガイ	●	●	●								●							
10								イガイ	●	●	●	●						●	●			●			
11								イタボガキ	マガキ	●								●							
12								バカガイ	シオフキガイ	●								●							
13								カワホトトギス	イガイダマシ	●	●							●				●			
14								シジミ	ヤマトシジミ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●			
15								マルスダレガイ	アサリ	●	●							●							
16								ウミタケガイモドキ	ソトオリガイ	●	●	●	●					●	●	●	●	●			
17					環形動物	ゴカイ	ゴカイ	ゴカイ	カワゴカイ属の一種	●	●	●	●					●	●	●	●	●			
18									イトメ	●	●											●			
19									イトゴカイ科の一種	●	●	●	●					●	●	●	●	●			
20	節足動物	顎脚	フジツボ	フジツボ	シロスジフジツボ	●	●	●	●	●				●											
21					アメリカフジツボ	●	●							●				●							
22					ヨーロッパフジツボ	●	●	●	●	●				●	●										
23					ドロフジツボ	●	●	●	●	●				●	●	●									
24					ハマトビムシ	●	●	●	●	●				●											
25					ワラジムシ	●	●	●	●	●				●				●							
26					コツブムシ	●	●							●	●										
27					フナムシ	●	●			●				●	●										
28					エビ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●							
29					テナガエビ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●							
30					テッポウエビ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●							
31					テッポウエビ属の一種	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●							
32					チゴガニ	★	★	★						★	★	★	★	★							
33					コモツキガニ	★	★	★	★					★	★	★	★	★							
34					オサガニ	★	★	★	★					★	★	★	★	★							
35					ベンケイガニ	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★							
36					アカテガニ	●	●		●	●				●	●			●							
37					アシハラガニ	●	●		●	●				●	●			●							
38					ベンケイガニ	●	●		●	●				●	●			●							
39					モクズガニ	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★						
合計	4門	6綱	13目	23科	38種	25	30	16	21	12	11	9	9	12	8	6	7	17	27	13	12	9	16	10	7
						38				19				13				31				19			

※凡例： ● 確認種
 ★ 優占種

優占種

○チゴガニ (*Ilyoplax pusilla*) [コメツキガニ科]



分布：東京湾～九州

甲幅：0.8cm

特徴：河口付近の高潮線付近に生息し、干潟の砂泥に巣穴を掘り、群れで見られる。

○コメツキガニ (*Scopimera globosa*) [コメツキガニ科]



分布：北海道南部以南

甲幅：1cm

特徴：河口や内湾の砂泥地に集団で住む小型種。直径5mm前後の巣穴をもち、砂泥をはさみ脚ですくい、口元で転がしながら有機物だけをこして食べ、残った砂を団子状にして捨てる。

○ヤマトオサガニ (*Macrophthalmus japonicus*) [オサガニ科]



分布：青森県以南

甲幅：3.5cm

特徴：内湾や河口付近の軟泥底に生息する。本州や九州沿岸では最も普通の種。直径1cmほどの斜めの巣穴を掘る。

○クロベンケイガニ (*Chiromantes dehaani*) [ベンケイガニ科]



分布：東北地方以南

甲幅：3.5cm

特徴：海岸よりやや内陸淡水の影響が強い汽水～淡水域に生息する。夜行性。

○タカノケフサイソガニ (*Hemigrapsus takanoi*) [モクズガニ科]



分布：北海道～沖縄

甲幅：3.5cm

特徴：内湾や河口域の石の下などに最も普通に見られるカニのひとつ。

(2)重要種

水生生物調査で確認された重要種とその選定根拠を表 2.34に、確認地点を表 2.35に示す。

水生生物調査で確認された重要種は、環境省 RL で VU（絶滅危惧Ⅱ類）に指定されているマサゴハゼ、NT（準絶滅危惧）に指定されているヤマトシジミ等 9 種であった。

地点別にみると、重要種は調査対象地点の干潟 4 地点全てで確認されており、最も多く確認された地点は、6 種が確認された干潟植生有（下流部）と干潟植生無（上流部）であった。

以下に重要種の概要を述べる。

表 2.34 重要種の選定根拠（水生生物）

番号	科名	種名	選定根拠			
			1	2	3	4
1	ウナギ	ウナギ			DD	B
2	コイ	マルタ				C
3	ハゼ	トビハゼ			NT	A
4		ビリンゴ				B
5		アシシロハゼ				C
6		マサゴハゼ			VU	C
7		アベハゼ				C
8		ヌマチチブ				C
9		シジミ	ヤマトシジミ			NT

注)

- 「文化財保護法」（昭和25年法律第214号）に基づき指定される天然記念物及び特別天然記念物。または、都道府県及び市町村が条例により指定する天然記念物
- 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」（平成4年法律第75号）に基づき指定される国内希少動植物種
- 「環境省レッドリスト 汽水魚類・淡水魚類（環境省：2007）」及び「環境省レッドリスト 陸産貝類・淡水産貝類（環境省：2007）」「環境省レッドリスト 甲殻類（環境省：2006）」に記載された種
EX：絶滅、EW：野生絶滅、CR：絶滅危惧ⅠA類、EN：絶滅危惧ⅠB類、VU：絶滅危惧Ⅱ類、NT：準絶滅危惧、DD：情報不足、LP：絶滅のおそれのある地域個体群
- 「東京都の保護上重要な野生生物種－1998年版－（東京都環境保全局）」に記載された種（区部）
 - 絶滅の危機に瀕している種
環境庁RDBの「絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅰ類）」に相当する種
 - 絶滅の危機が増大している種
環境庁RDBの「危急種（絶滅危惧Ⅱ類）」に相当する種
 - 生息環境の変化によりAランクやBランクへの移行が危惧される種
環境庁RDBの「希少種（準絶滅危惧）」に相当する種
 - 野生で絶滅と判断される種 ・ ここ50年程観察例のない種
 - 生息域が限定されていたり孤立しており、地域レベルで考慮すると絶滅の危機が増大している種（地域限定種）

表 2.35 重要種確認地点 (水生生物)

番号	種名	干潟植生有								干潟植生無							
		下流部				上流部				下流部				上流部			
		春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬
1	ウナギ															●	
2	マルタ														●		
3	トビハゼ									●	●						
4	ビリンゴ	●	●	●		●	●	●			●				●		
5	アシシロハゼ		●			●											
6	マサゴハゼ			●				●	●	●			●	●			
7	アベハゼ		●	●		●	●	●	●	●	●						
8	ヌマチチブ		●												●		
9	ヤマトシジミ	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●
季節別種数		2	5	4	1	4	3	4	3	4	4	1	2	2	4	2	1
地点別種数		6				5				5				6			

○ウナギ (*Anguilla japonica*) [ウナギ科]



分布：全国各地

全長：約 100cm

特徴：河川の中・下流域や河口域に多いが、ときには上流域、沿岸域にも生息する。夜行性。甲殻類、水生昆虫、貝類、小魚等を食べる。

○マルタ (*Tribolodon brandti*) [コイ科]



分布：東京湾、富山湾以北

全長：40～60cm

特徴：比較的大きい河川の汽水域や沿岸域に生息する。稚魚期は浮遊動物や流下動物を食べるが、成魚は主として二枚貝やゴカイ類を食べる。

○トビハゼ (*Periophthalmus modestus*) [ハゼ科]



分布：東京以西の太平洋岸各地、瀬戸内海沿岸、沖縄島以北の琉球列島

全長：約 10cm

特徴：泥質干潟の発達した河口付近の泥の中に垂直な巣穴を掘って生息する。甲殻類やゴカイ類、昆虫等を食べる。

○ビリンゴ (*Gymnogobius breunigii*) [ハゼ科]

※詳細は P83 参照

○アシシロハゼ (*Acanthogobius lactipes*) [ハゼ科]



分布：北海道、本州、四国、九州

全長：約 9cm

特徴：内湾や汽水域に生息する。ほとんど淡水の場所にも生息する。砂底または砂礫底にすみ、雑食性で底生動物や藻類を食べる。

○マサゴハゼ (*Pseudogobius masago*) [ハゼ科]

※詳細は p83 参照

○アベハゼ (*Mugilogobius abei*) [ハゼ科]



分布：宮城県・福井県以南の本州、四国、九州、種子島

全長：約 5cm

特徴：河口の汽水域に生息し、有機物が堆積して臭気を放つような泥底を好む。人為的な汚染にも強い。雑食性。

○ヌマチチブ (*Tridentiger brevispinis*) [ハゼ科]



分布：北海道～九州

全長：約 15cm

特徴：川の汽水域から中流域、汽水湖、ため池など多様な場所に生息する。泥底のところにも生息するが、本来は岩や倒木など固い基底がある場所や礫底を好む。水生昆虫や小魚を食べる。

○ヤマトシジミ (*Corbicula japonica*) [シジミ科]



分布：北海道～九州の日本各地

殻長：約 4cm

特徴：河口や汽水湖の 1～2m 以浅の砂礫ないし砂泥底に生息する。水中の浮遊懸濁物や微細藻類を鰓で濾しとって摂餌する。多摩川河口域では一時期減少していたが、近年はまた増加傾向にある。

(3)外来種

水生生物調査で確認された外来種（外来生物法で特定外来生物及び要注意外来生物に指定されている種）を表 2.36に、確認地点を表 2.37に示す。

水生生物調査で確認された外来種は、要注意外来生物に指定されているコウロエンカワヒバリガイ及びイガイダマシの2種であった。

地点別にみると、外来種が確認された地点は2地点であり、干潟植生無の下流部及び上流部で確認された。

以下に外来種の概要を述べる。

表 2.36 外来種の選定根拠（水生生物）

No.	科名	種名	選定根拠	
			1	2
1	イガイ	コウロエンカワヒバリガイ		(2)
2	カワホトトギス	イガイダマシ		(2)

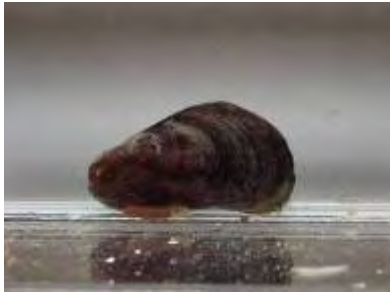
注)

1. 「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律」により、特定外来生物に指定されている生物
2. 「要注意外来生物リスト」に記載されている生物
 - (1)被害に係る一定の知見があり、引き続き指定の適否について検討する外来生物
 - (2)被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物
 - (3)選定の対象とならないが注意喚起が必要な外来生物（他法令の規制対象種）
 - (4)別途総合的な取組みを進める外来生物（緑化植物）

表 2.37 外来種確認状況

番号	種名	干潟植生有								干潟植生無							
		下流部				上流部				下流部				上流部			
		春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬	春	夏	秋	冬
1	コウロエンカワヒバリガイ									●	●	●			●		●
2	イガイダマシ										●				●		
合計		0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	1	0	0	2	0	1

○コウロエンカワヒバリガイ (*Xenostrobus securis*) [イガイ科]



原産：オーストラリア、ニュージーランド

殻長：1～1.5cm

特徴：汽水域に生息するイガイ科の二枚貝で、淡水域に生息する同属のカワヒバリガイとは外部形態が非常によく似ているため見分けが難しい。

○イガイダマシ (*Mytilopsis sallei*) [カワホトトギス科]



原産：西インド諸島

殻長：3mm 前後

特徴：イガイ類に似た長三角形で、汽水域の岩礫などに付着する生態面でもイガイ類に類似する。

2.8 重要種確認位置

本調査で確認された重要種の確認位置図を季節別に図 2.4～図 2.9に示す。

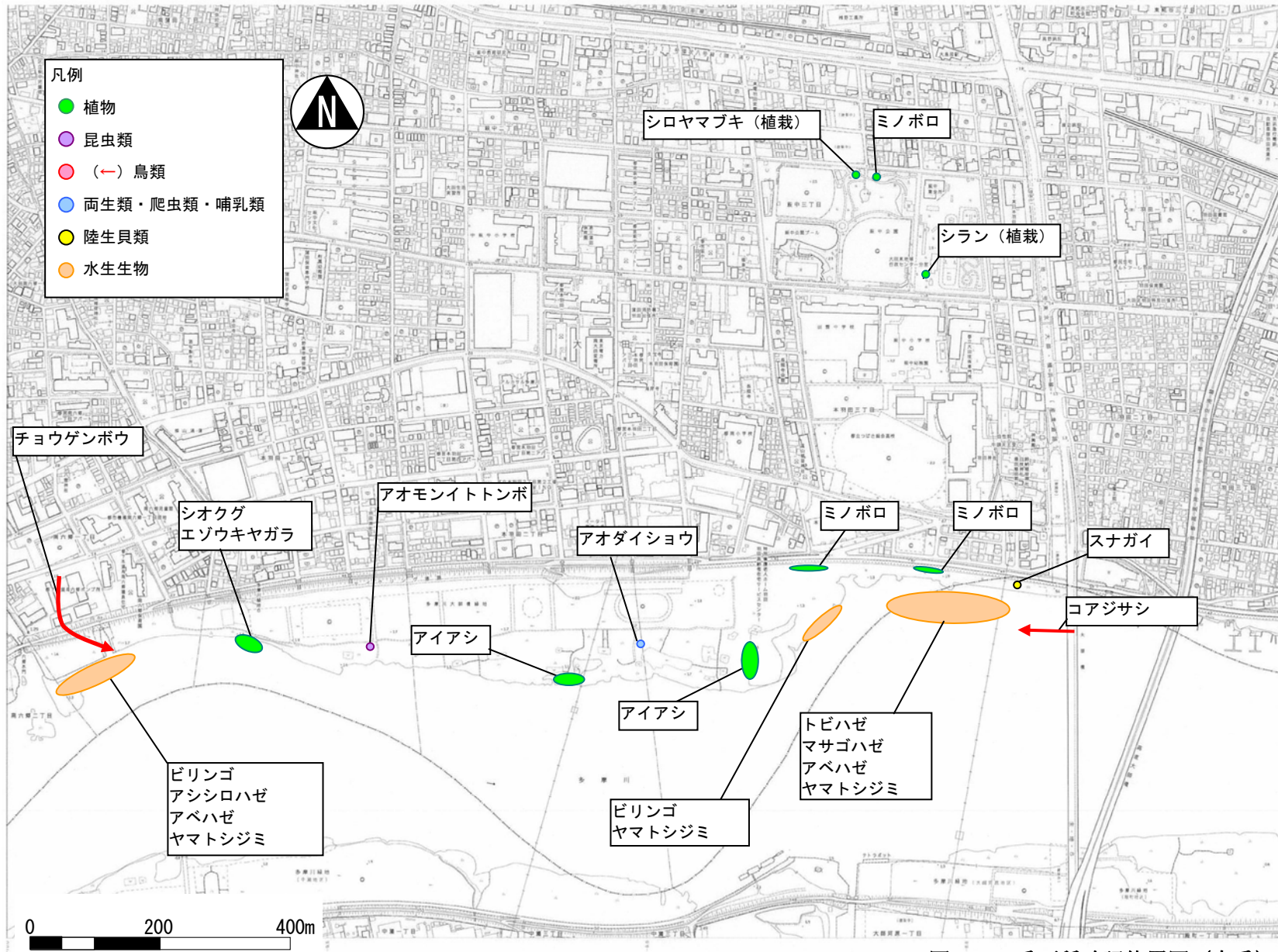


図 2.4 重要種確認位置図 (春季) その1

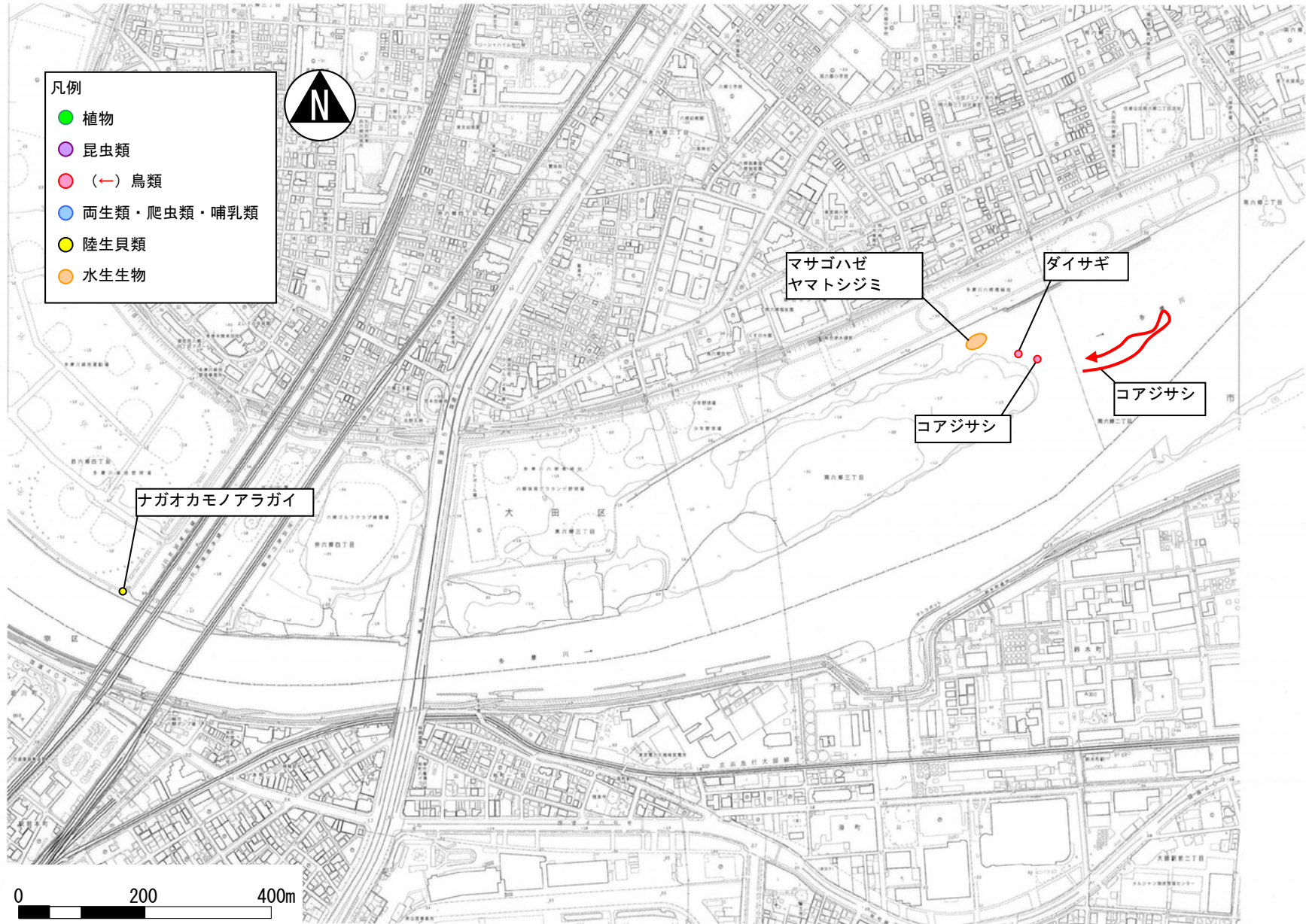


図 2.5 重要種確認位置図 (春季) その2

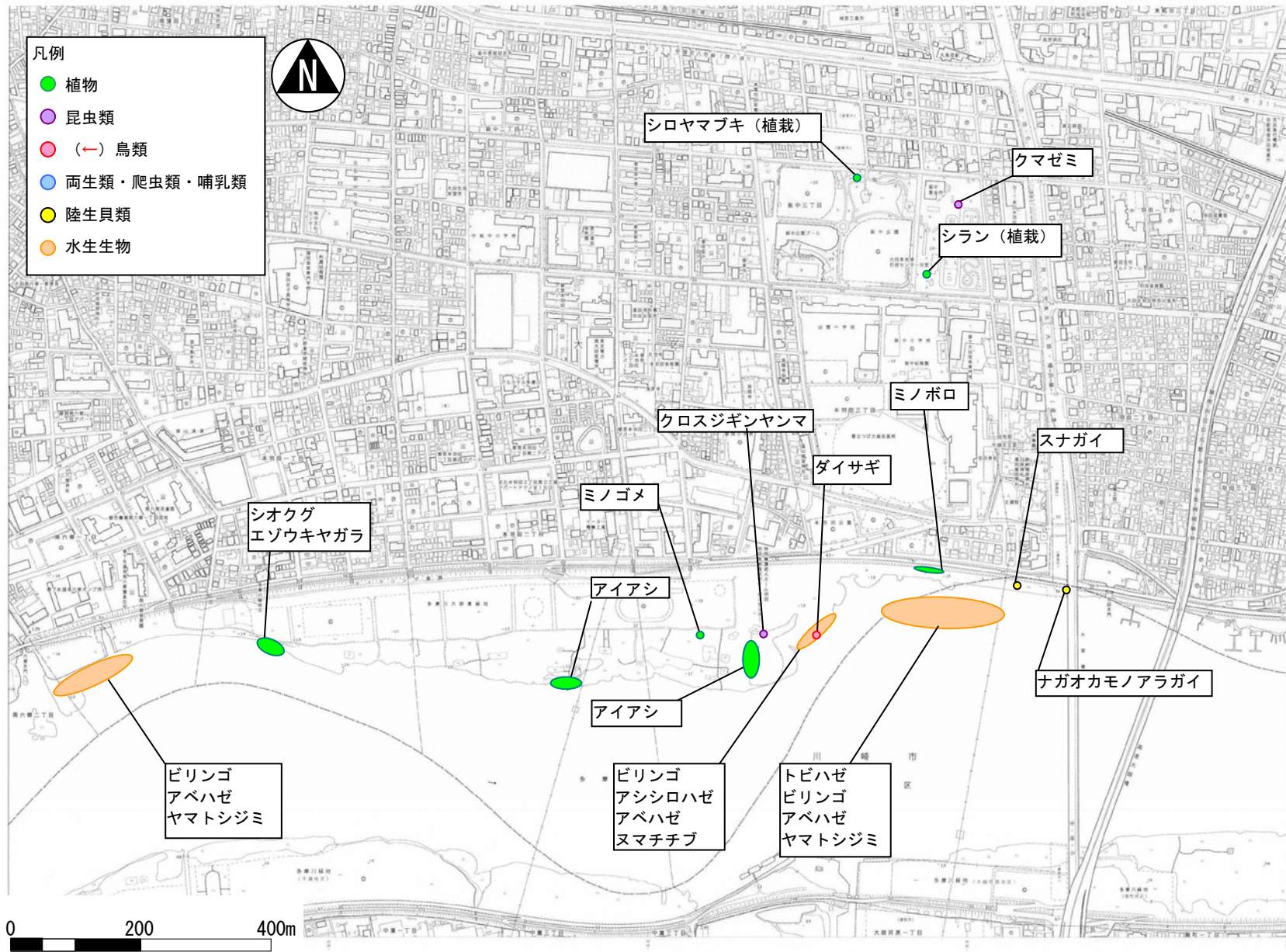


図 2.6 重要種確認位置図 (夏季) その1

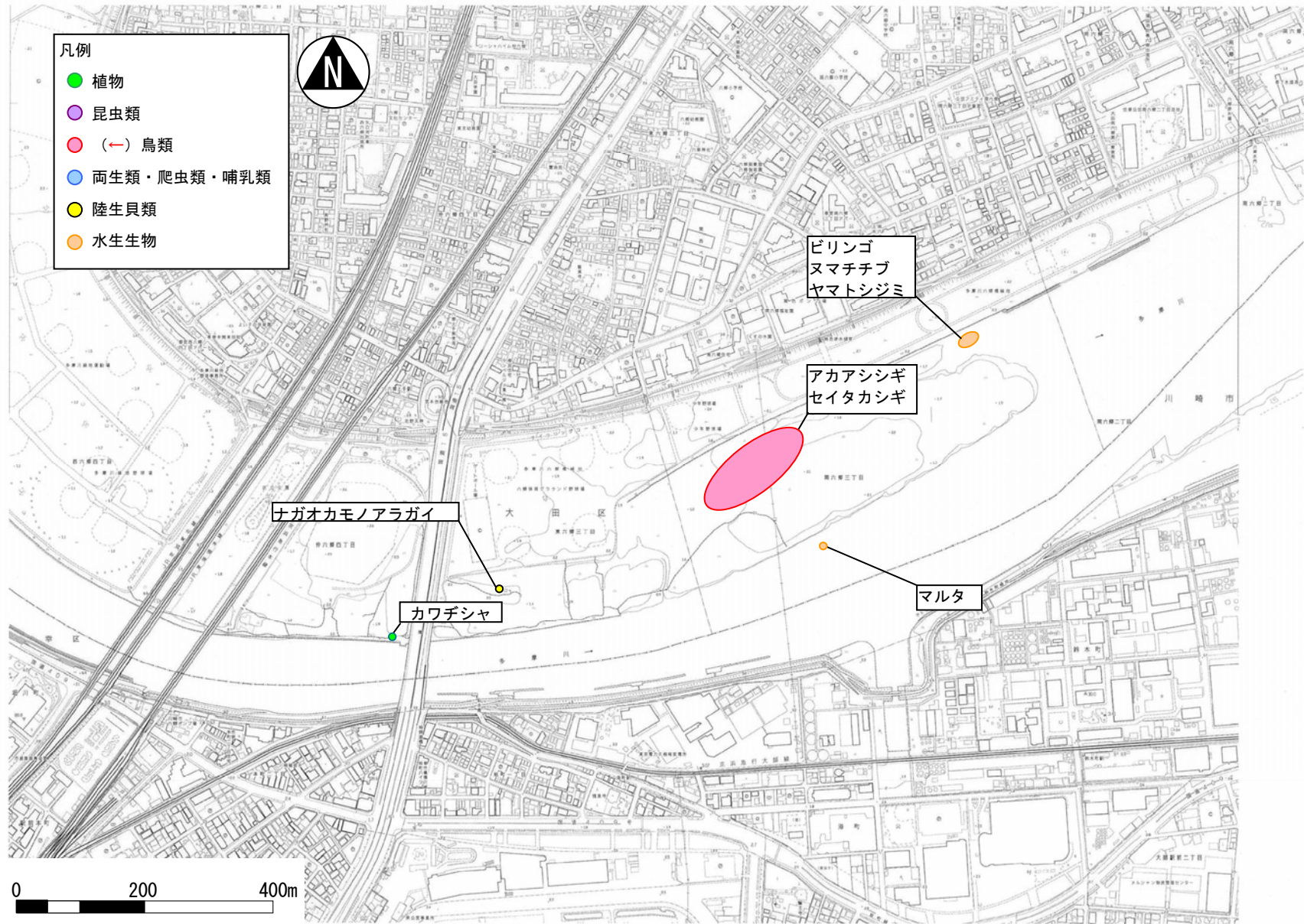


図 2.7 重要種確認位置図 (夏季) その2

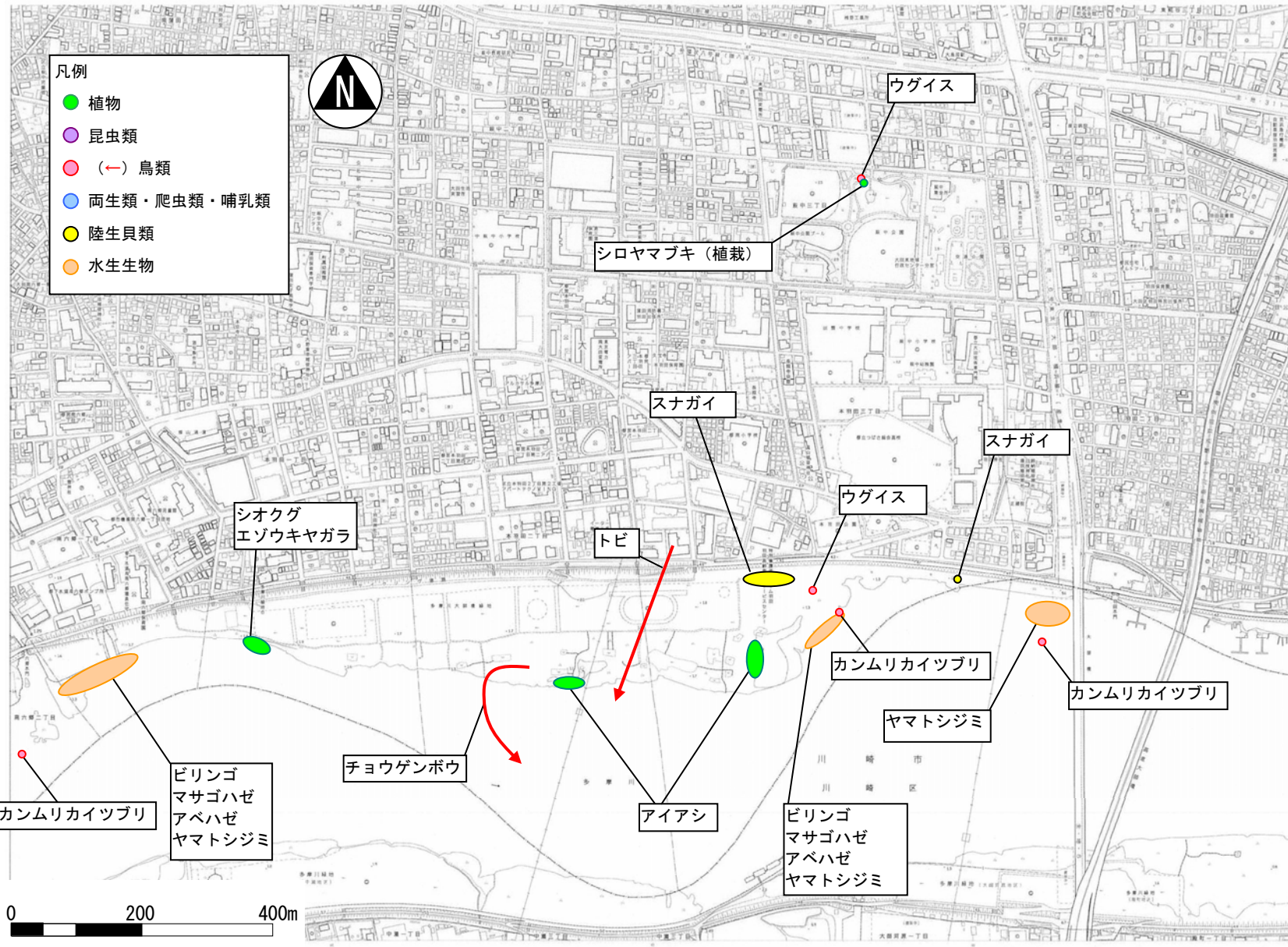


図 2.8 重要種確認位置図 (秋季) その1

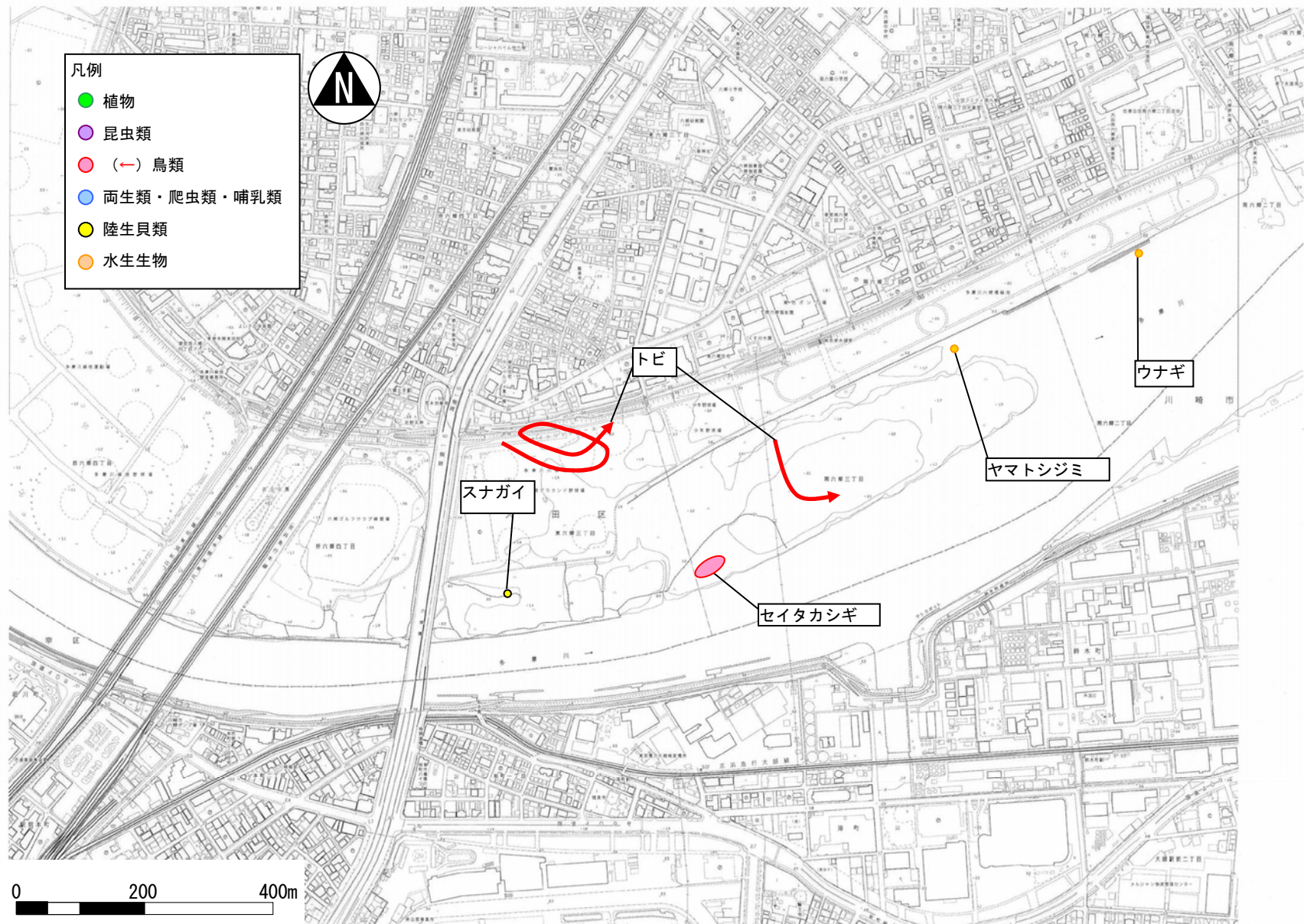


図 2.9 重要種確認位置図 (秋季) その2

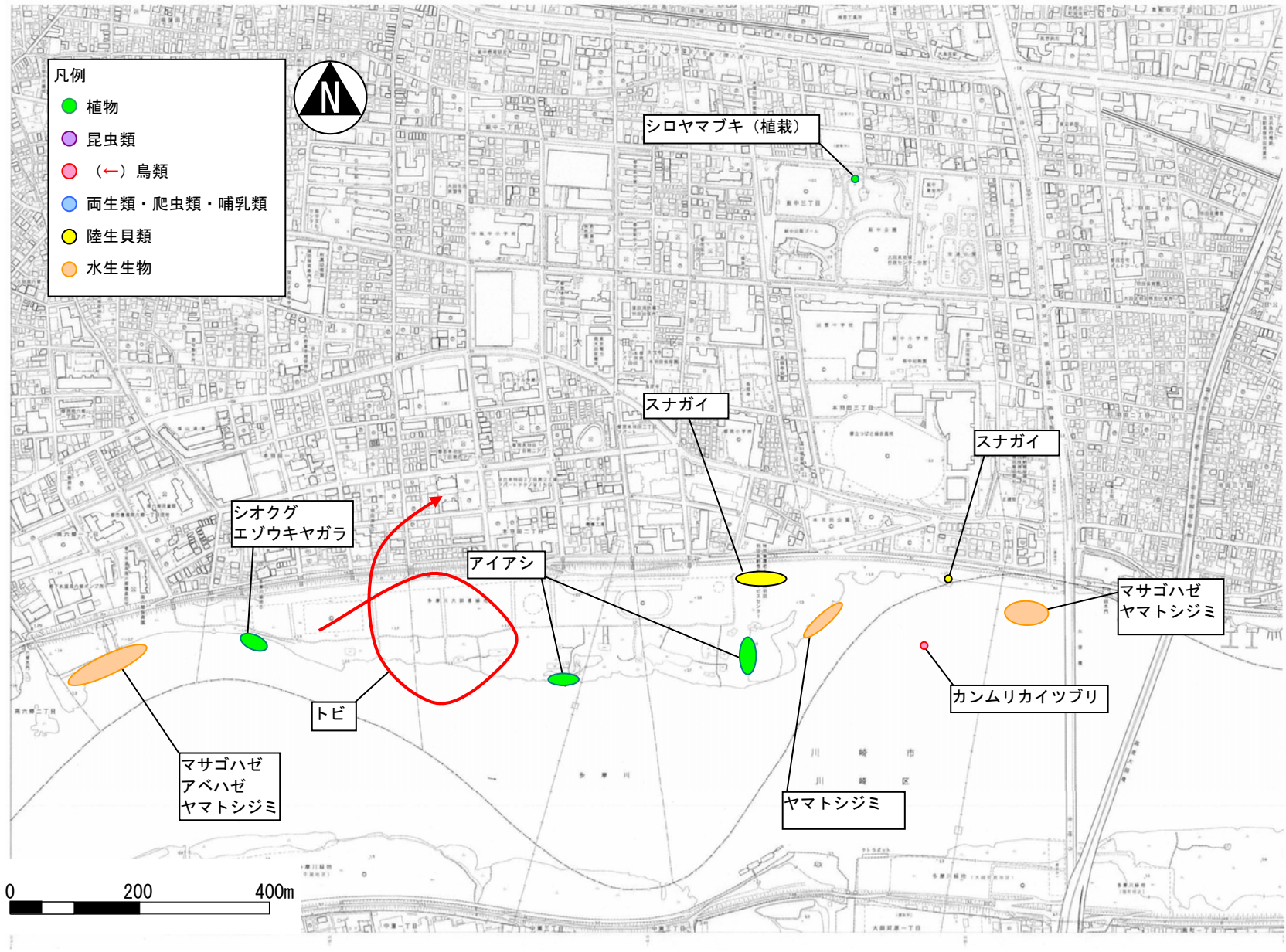


図 2.10 重要種確認位置図 (冬季) その1

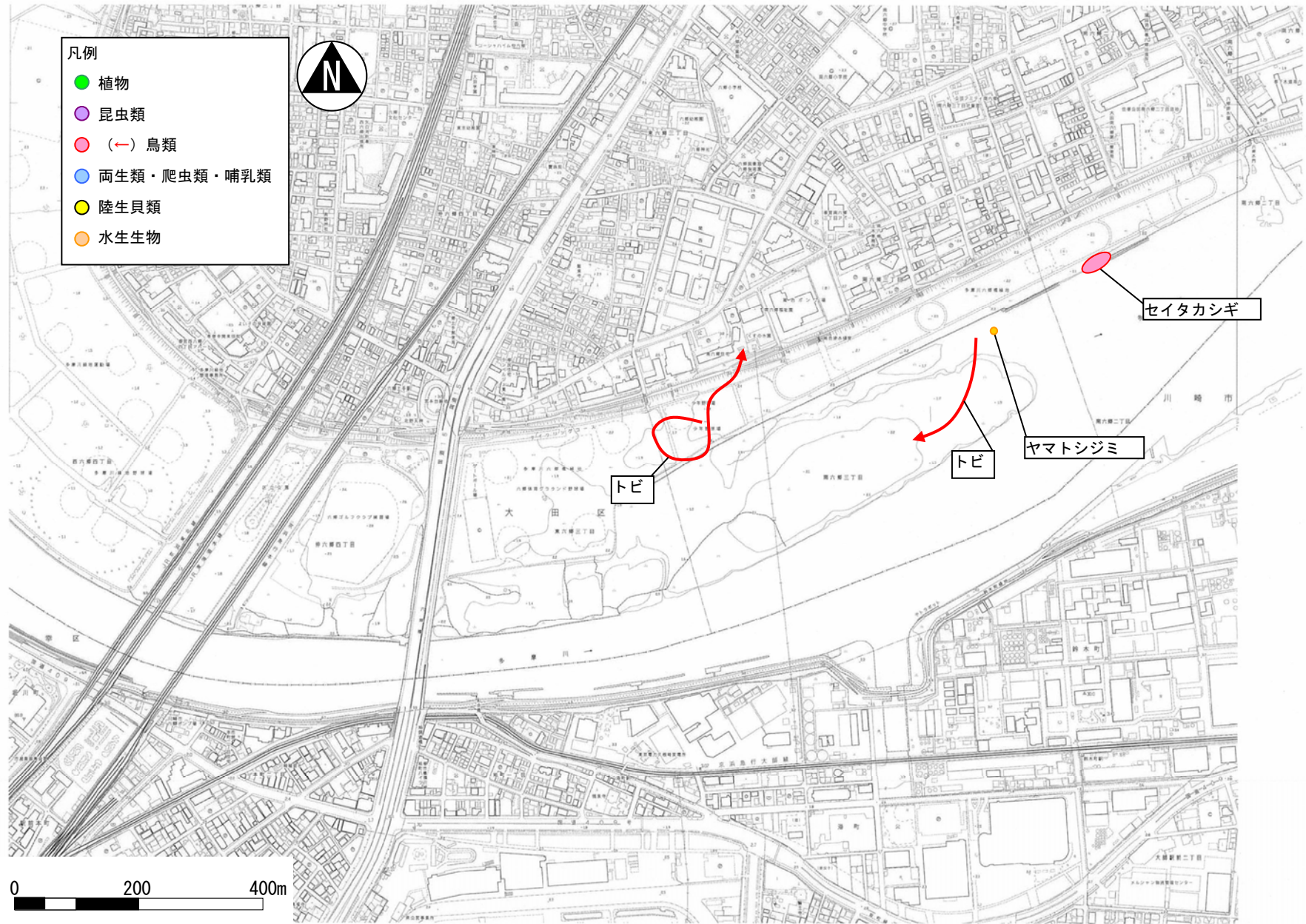


図 2.11 重要種確認位置図 (冬季) その2

2.9 外来種確認位置

本調査で確認された外来種の確認位置図を、図 2.12～図 2.19に示す。なお、植物調査に関しては特定外来種のみを記載した。

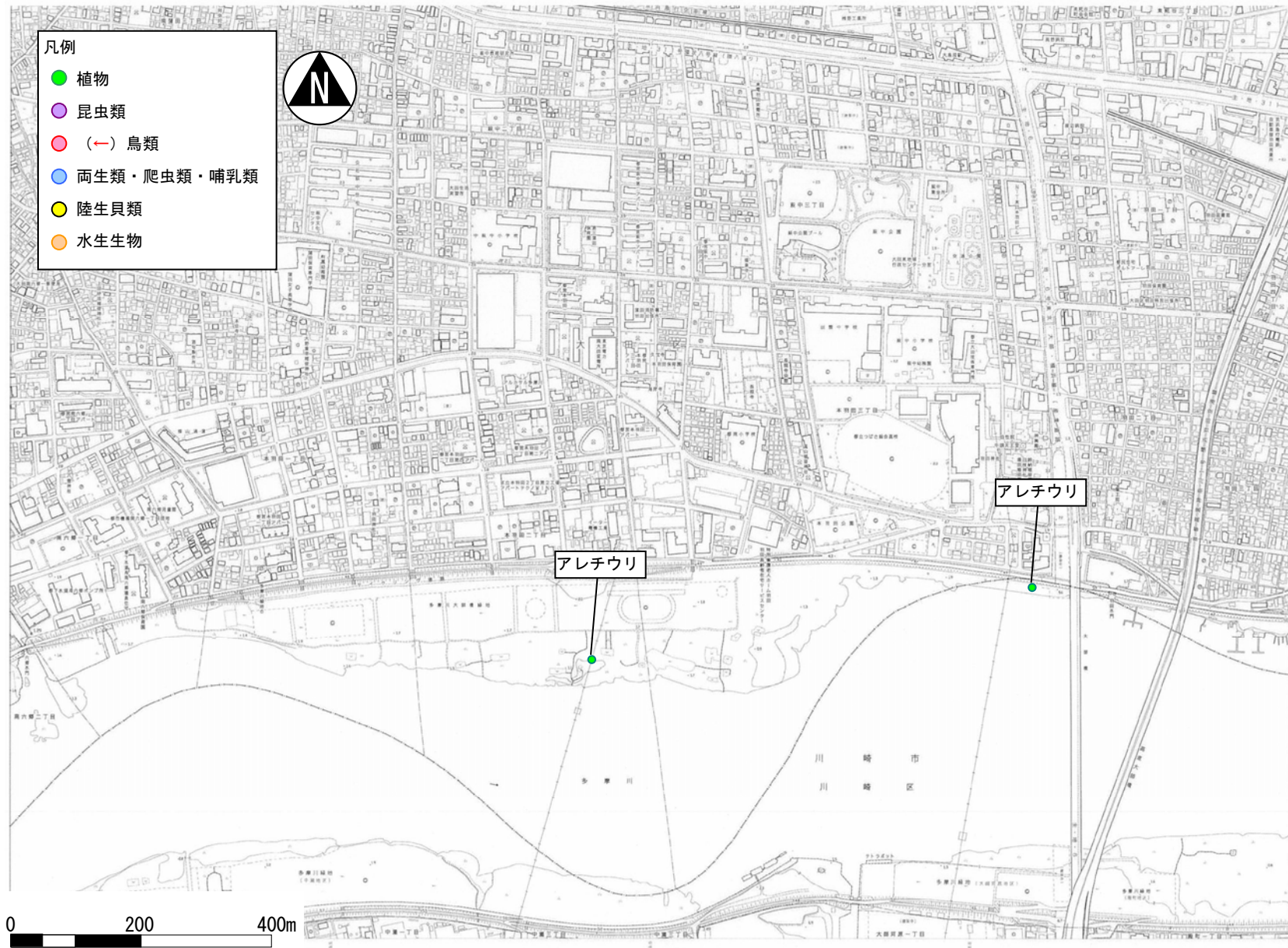


図 2.12 外来種確認位置図 (春季) その1

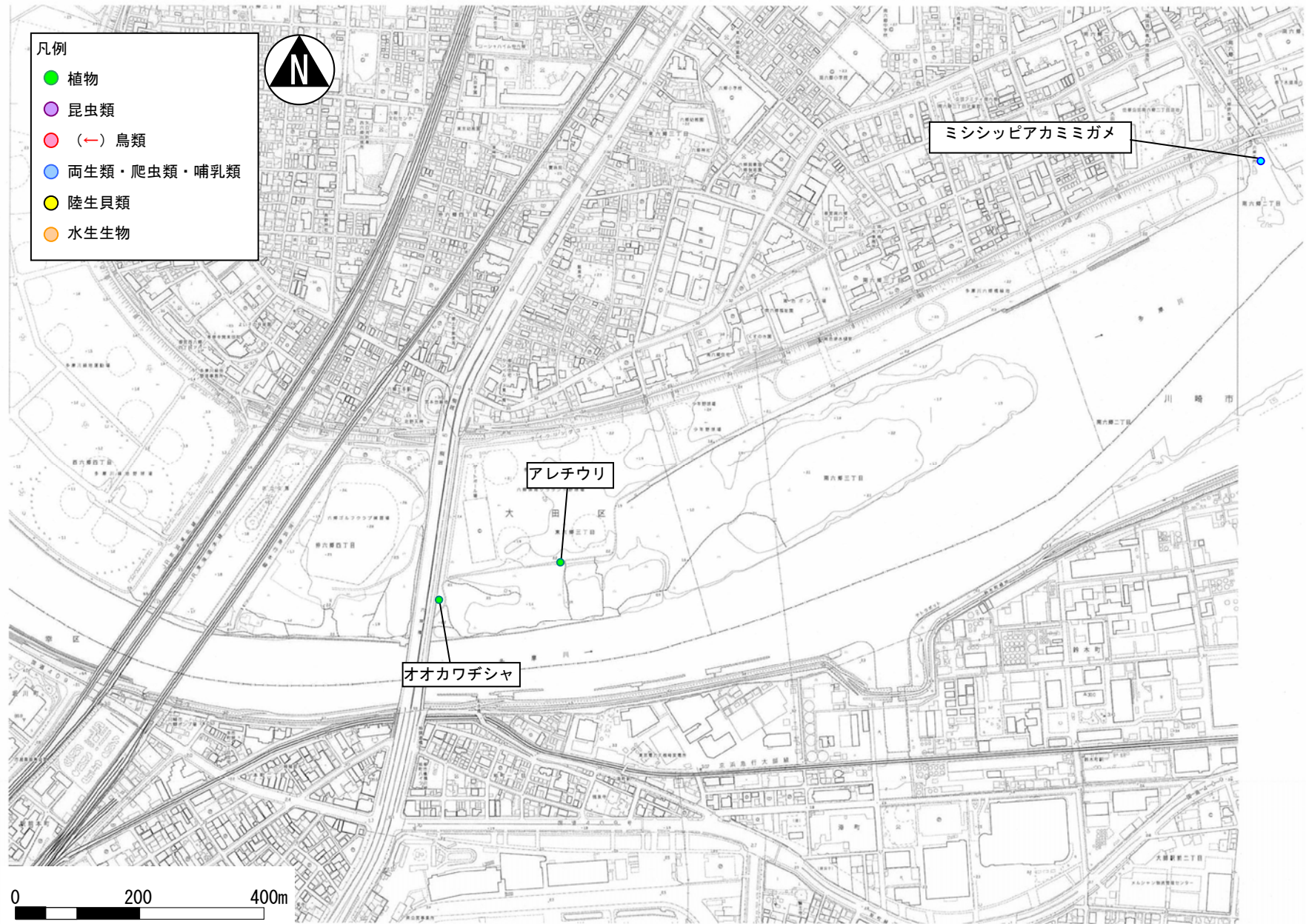


図 2.13 外来種確認位置図(春季) その2

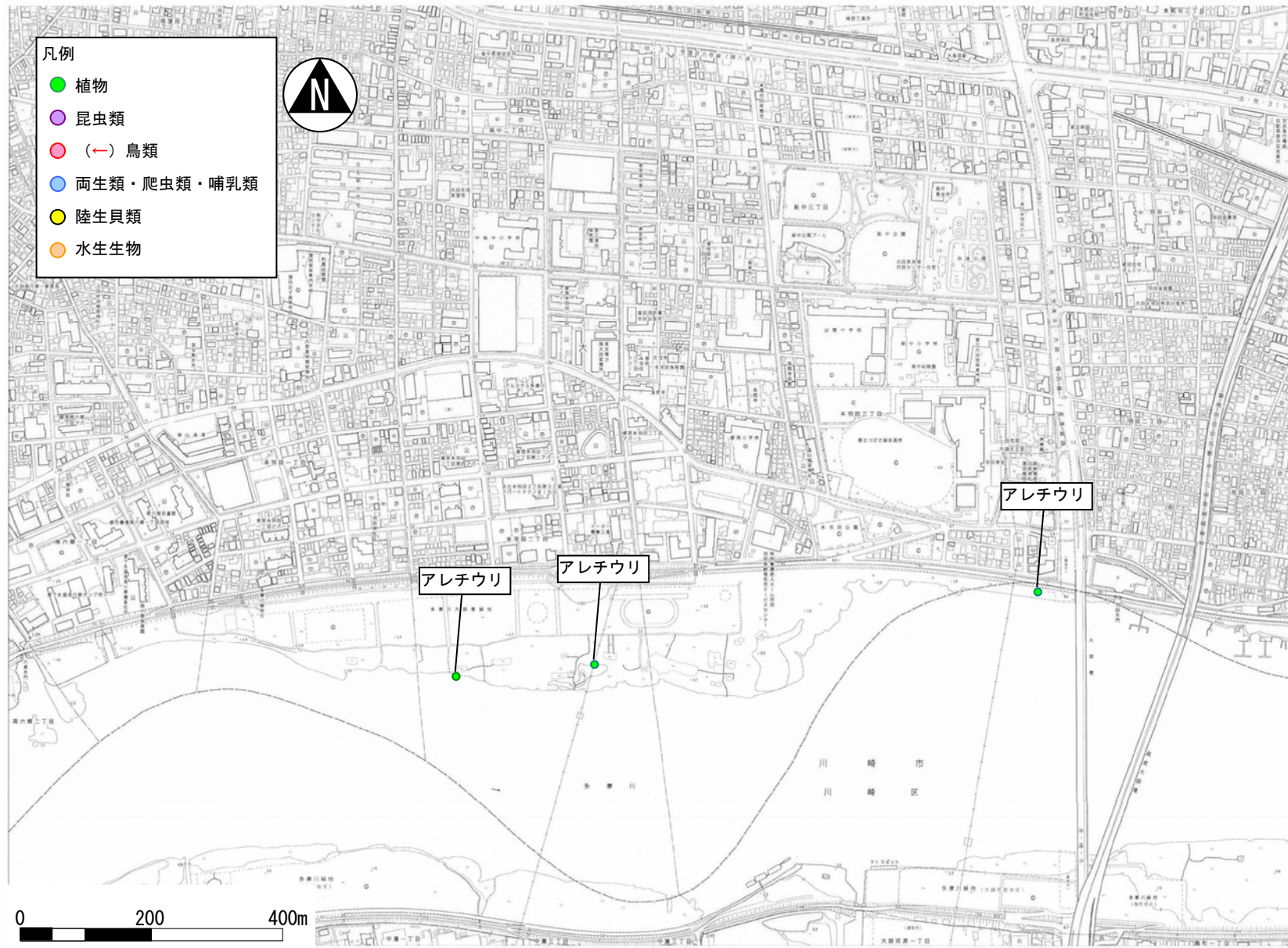


図 2.14 外来種確認位置図(夏季) その1

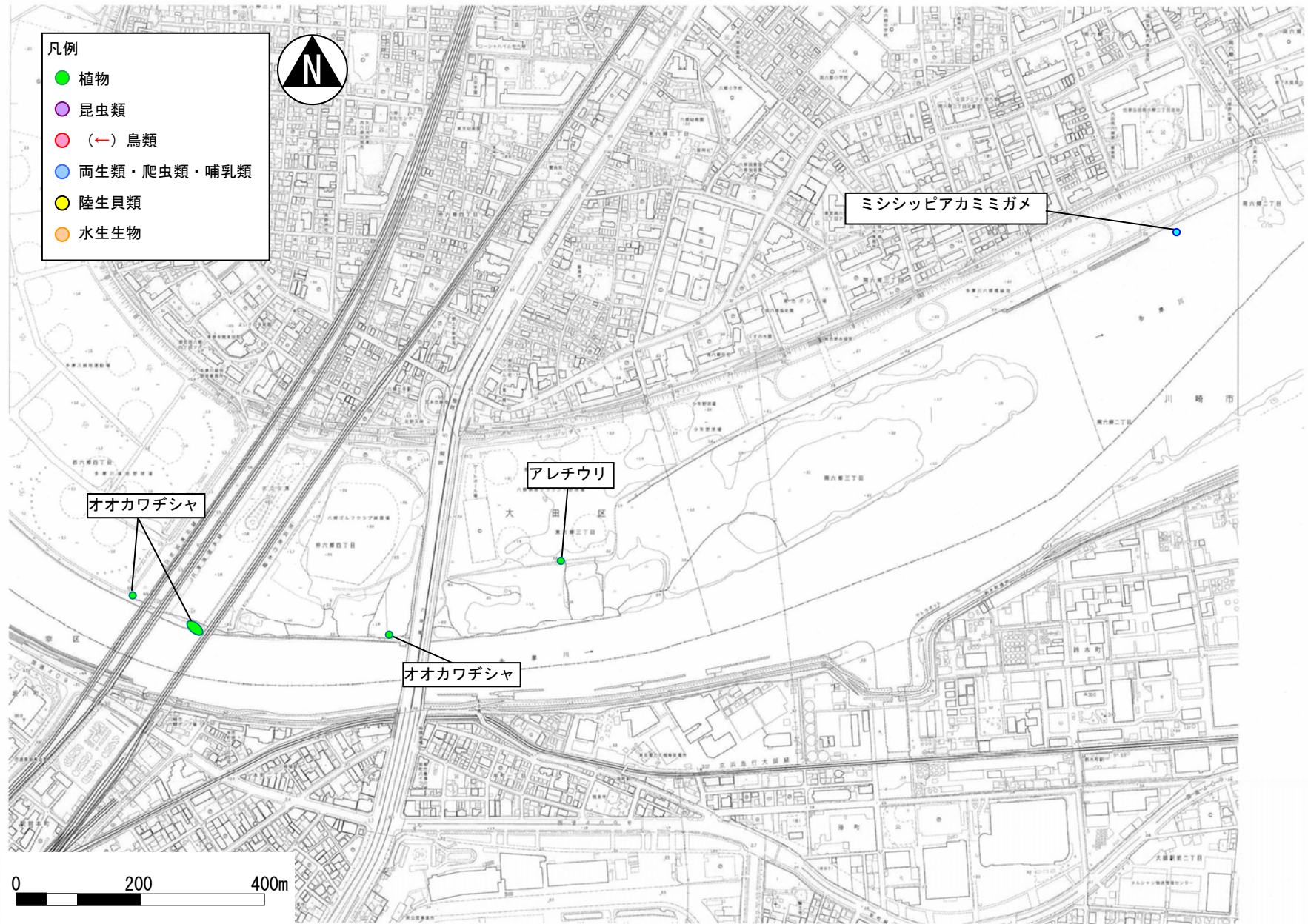


図 2.15 外来種確認位置図(夏季) その2

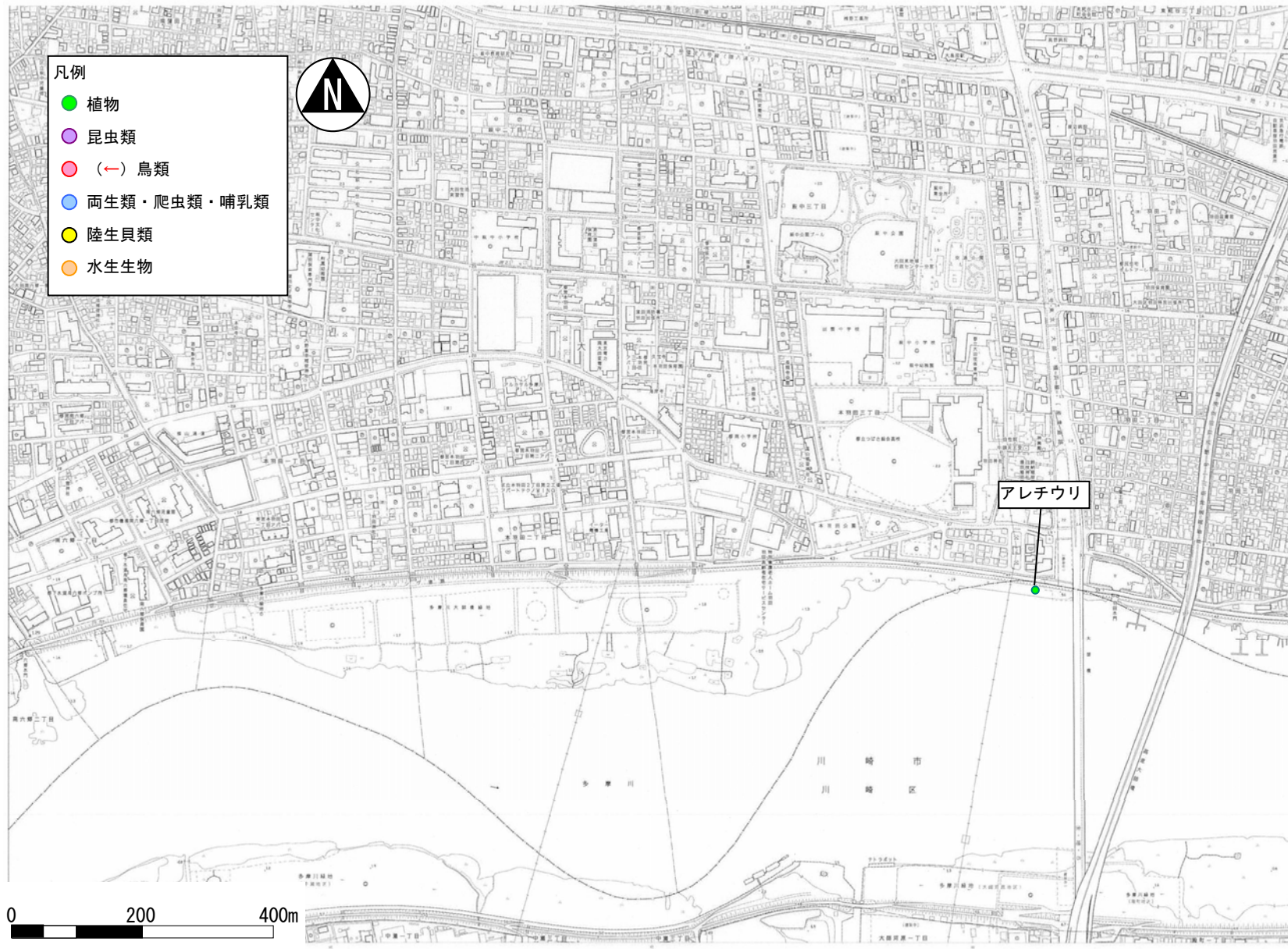


図 2.16 外来種確認位置図 (秋季) その1

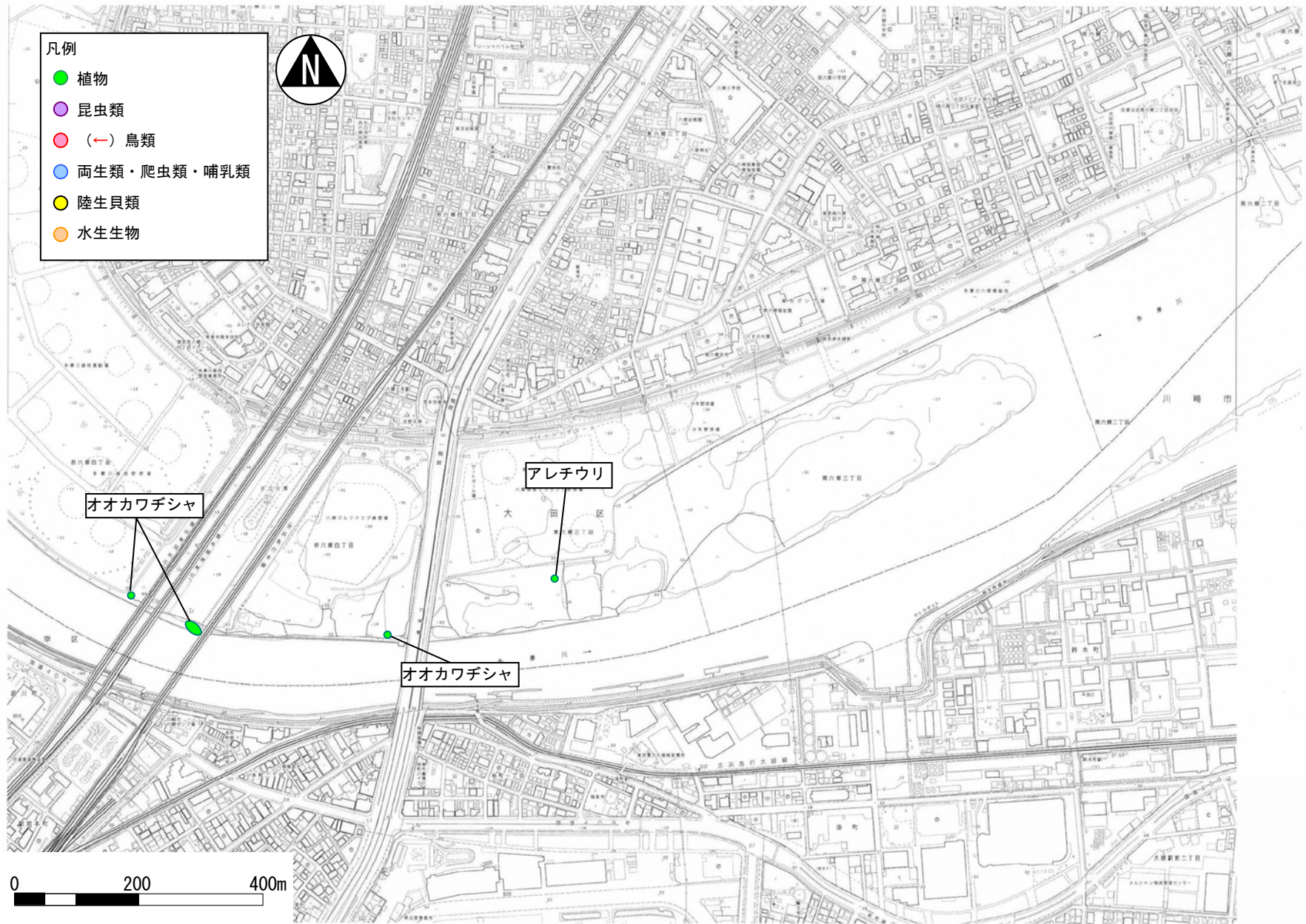


図 2.17 外来種確認位置図 (秋季) その2



図 2.18 外来種確認位置図 (冬季) その 1

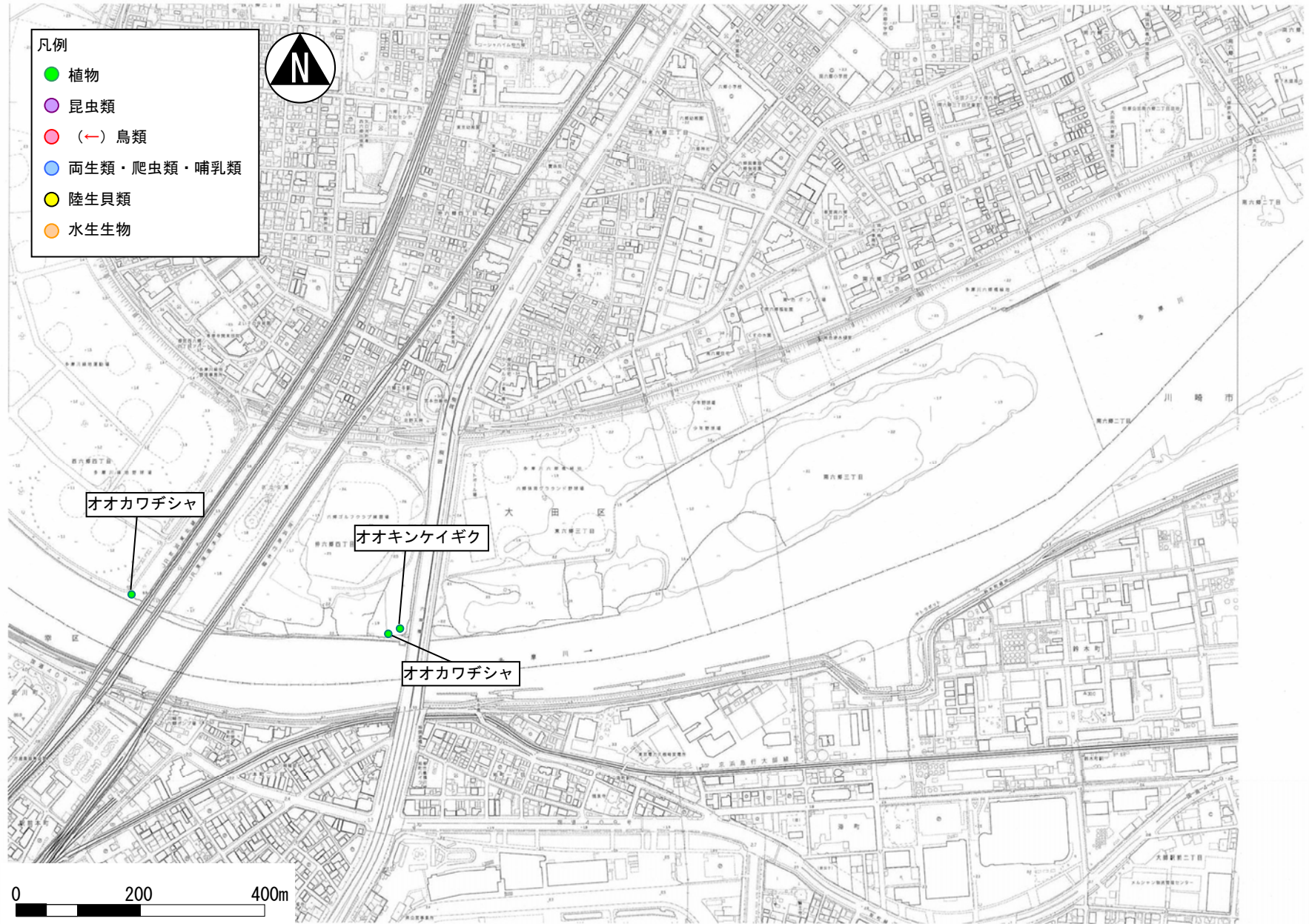


図 2.19 外来種確認位置図 (冬季) その2

3. 既往調査結果との比較

本調査結果と既往調査結果から、分類群別に重要種及び外来種の経年確認状況をまとめた。既往調査結果には、原則的に、大田区で過去実施された自然環境保全基礎調査及び、国土交通省京浜河川事務所で実施している河川水辺の国勢調査結果の直近の記録を用い、今回の調査範囲を含む地点での確認状況を抜粋した。

3.1 植物

3.1.1 引用文献

植物は以下の既往調査結果から、重要種及び外来種の経年確認状況を取りまとめた。なお、河川水辺の国勢調査の直近の報告書である C は、調査季節が秋のみであるため、補足として B の結果も使用した。

表 3.1 引用文献（植物）

文献	既往調査名	調査年度	調査季節	調査範囲	抜粋した地点	確認種数
A	「大田区自然環境保全基礎調査報告書 —大田区の植生—」 (大田区：平成 5 年)	1992	春、夏、秋	大田区内全域	蒲田地区	396
B	「平成 11 年度 多摩川水系 (多摩川・浅川)植物調査報告書」 (京浜河川事務所：平成 12 年)	1999	春、夏、秋	多摩川 (京浜河川事務所管 理区間)	大師橋下流部 大師橋緑地公園	234
C	「平成 17 年度多摩川植生調査」 (京浜河川事務所：平成 18 年)	2005	秋	多摩川 (京浜河川事務所管 理区間)	大師橋下流部 大師橋緑地公園	152

3.1.2 重要種の経年確認状況の比較

植物の重要種の経年確認状況を表 3.2に示す。

植物の重要種は、これまでの調査で13種が確認されている。調査年度別に見ると、1992年度の調査では10種が種確認されているが、1999年度及び2005年度では確認されず、今回調査では8種が確認された。今回初めて記録された種は、シロヤマブキ、ミノボロ、シランの3種であったが、このうちシロヤマブキとシランは植栽での確認である。また過去に記録のある種のうち、シロバナタデクサ、タコノアシ、ミゾコウジュ、ウラギク、ヤガミスゲの5種は今回の調査では確認されなかった。

表 3.2 重要種の経年確認状況 (植物)

番号	科名	種名	環境省 RL	東京都 RDB	文献A	文献B	文献C	今回
					1992	1999	2005	2009
1	タデ	シロバナサクラタデ		C	●			
2	ユキノシタ	タコノアシ	NT	A	●			
3	バラ	シロヤマブキ	EN					○
4	シソ	ミゾコウジュ	NT	A	●			
5	ゴマノハグサ	カワヂシャ	NT		●			●
6	キク	ウラギク	VU	A	●			
7	イネ	ミノゴメ		C	●			●
8		ミノボロ		C				●
9		アイアシ		B	●			●
10	カヤツリグサ	ヤガミスゲ		C	●			
11		シオクグ		C	●			●
12		エゾウキヤガラ		C	●			●
13	ラン	シラン	NT					○
種数					10	0	0	8

※表中の●は自生、○は植栽・逸出

3.1.3 外来種の経年確認状況の比較

植物の外来種の経年確認状況を表 3.2に示す。

植物の外来種は、過去4回の調査で35種が確認されている。調査年度別に見ると、1992年度の調査では30種が種確認され、1999年度は26種、2005年度は22種、今回調査では25種が確認された。今回初めて記録された種は、特定外来種のおオカワヂシャ、オオキンケイギクの他、おオフトバムグラ、ヤセウツボの4種であった。

表 3.3 外来種の経年確認状況 (植物)

番号	科名	種名	カテゴリー※	文献A	文献B	文献C	今回
				1992	1999	2005	2009
1	タデ	エゾノギシギシ	(2)	●	●	●	
2	アブラナ	オランダガラシ	(2)	●			
3	マメ	ハリエンジュ	(4)	●	●	●	●
4	カタバミ	ムラサキカタバミ	(2)	●		●	●
5	ウリ	アレチウリ	特定	●	●	●	●
6	アカバナ	メマツヨイグサ	(2)	●	●	●	●
7		コマツヨイグサ	(2)	●	●		●
8	モクセイ	トウネズミモチ	(4)	●	●	●	●
9	アカネ	おオフトバムグラ	(2)				●
10	ヒルガオ	セイヨウヒルガオ	(2)	●			
11		アメリカネナシカズラ	(2)	●	●	●	●
12	ナス	ワルナスビ	(2)	●	●	●	●
13	ゴマノハグサ	おオカワヂシャ	特定				●
14	ハマウツボ	ヤセウツボ	(2)				●
15	おオバコ	ヘラおオバコ	(2)	●	●	●	●
16	キク	ブタクサ	(2)	●	●	●	●
17		おオブタクサ	(1)	●	●	●	●
18		アメリカセンダングサ	(2)	●	●	●	●
19		コセンダングサ	(2)	●	●	●	
20		アメリカオニアザミ	(2)	●			
21		おオアレチノギク	(2)	●	●	●	●
22		おオキンケイギク	特定				●
23		ヒメムカシヨモギ	(2)	●	●	●	●
24		ハルジオン	(2)	●	●		
25		キクイモ	(2)		●	●	●
26		ブタナ	(2)	●	●		
27		セイトカアワダチソウ	(1)	●	●	●	●
28		ヒメジョオン	(2)	●	●	●	●
29	おオオナモミ	(2)	●	●	●	●	
30	アヤメ	キシウブ	(2)	●	●		
31	ツユクサ	ノハカタカラクサ	(2)	●			
32	イネ	カモガヤ	(4)	●	●		
33		シナダレスズメガヤ	(4)	●	●	●	●
34		おオウシノケグサ	(4)	●	●	●	●
35	カヤツリグサ	メリケンガヤツリ	(2)	●	●	●	●
種数				30	26	22	25

※カテゴリー詳細は表 2.7 を参照

3.2 昆虫類

3.2.1 引用文献

昆虫類は以下の既往調査結果から、重要種及び外来種の経年確認状況をとりとめた。なお文献 A では、今回の調査範囲を含む蒲田地区で確認記録のある種のみを抜粋したが、結果表が 70 年代、80 年代、90 年代の 3 つの年代に分けて整理した結果と 1 つの表としているため、どの年代での確認かが不明なため、90 年代までの記録として扱った。

表 3.4 引用文献（陸上昆虫類）

文献	既往調査名	調査年度	調査季節	調査範囲	抜粋した地点	確認種数
A	「大田区自然環境保全基礎調査報告書－大田区の昆虫－」 (大田区：平成 9 年)	1997	4～9 月	大田区内全域	蒲田地区	538
B	「平成 15 年度多摩川水系河川水辺の国勢調査陸上昆虫類等調査報告書」 (京浜河川事務所：平成 16 年)	2003	春、夏、秋	多摩川 (京浜河川事務所管理区間)	大師橋下流部	94

3.2.2 重要種の経年確認状況の比較

昆虫類の重要種の経年確認状況を表 3.5に示す。

昆虫類の重要種は、これまでの調査で 26 種が確認されている。年代別に見ると、90 年代までには 24 種が確認されているが、2003 年度では確認されず、今回調査では 3 種が確認された。今回初めて記録された種は、クロスジギンヤンマ及びクマゼミであった。

なお、環境省 RL で絶滅危惧 I 類に、東京都 RDB で A ランクに指定されているヒヌマイトトンボは今回の調査では確認されなかった。

表 3.5 重要種の経年確認状況（昆虫類）

番号	目名	科名	種名	環境省 RL	東京都 RDB	文献A ~90年代	文献B 2003	今回 2009		
1	トンボ	イトトンボ	アオモンイトトンボ		C	●		●		
2			ヒヌマイトトンボ	CR+EN	A	●				
3			オオイトトンボ		C	●				
4		ヤンマ	クロスジギンヤンマ		C			●		
5		オニヤンマ	オニヤンマ		B	●				
6		トンボ	ショウジョウトンボ		C	●				
7			ナツアカネ		C	●				
8	バッタ	ヒバリモドキ	キンヒバリ		B	●				
9	カメムシ	セミ	クマゼミ		C			●		
10	コウチュウ	オサムシ	キバネキバナガミズギワゴミムシ	NT	C	●				
11			コアトワアオゴミムシ		C	●				
12			アトワアオゴミムシ		C	●				
13			アオヘリホソゴミムシ		C	●				
14			トックリゴミムシ		C	●				
15			ノグチアオゴミムシ		C	●				
16			チャバネクビナガゴミムシ		C	●				
17			ナカグロキバネクビナガゴミムシ		C	●				
18			チャイロコムズギワゴミムシ		C	●				
19			ヒコサンツヤゴモクムシ		C	●				
20			ハンミョウ	エリザハンミョウ		C	●			
21				コハンミョウ		C	●			
22			ハネカクシ	オオツノハネカクシ		C	●			
23				ヒメフトツツハネカクシ		C	●			
24			コガネムシ	チビサクラコガネ		C	●			
25			カミキリムシ	マルクビケマダラカミキリ		B	●			
26				ブドウトラカミキリ		C	●			
種数						24	0	3		

3.2.3 外来種の経年確認状況の比較

昆虫類では、今回も含め過去に特定外来生物及び要注外来生物は確認されていない。

3.3 鳥類

3.3.1 引用文献

鳥類は以下の既往調査結果から、重要種及び外来種の経年確認状況をとりとまとめた。なお、文献Aでは1981年度の調査結果も掲載されているため、その結果も参照した。

表 3.6 引用文献（植物）

文献	既往調査名	調査年度	調査季節	調査範囲	抜粋した地点	確認種数
A	「大田区自然環境保全基礎調査報告書－大田区の野鳥－」 (大田区：平成7年)	1994 (1981)	全季節	大田区内全域	1981-河川地域 1994-六郷干潟コース	61 (60)
B	「平成16年度多摩川水系鳥類調査」 (京浜河川事務所：平成17年)	2004	4、5、6、 9、1月	多摩川 (京浜河川事務所管理区間)	大師橋下流部	30

3.3.2 重要種の経年確認状況の比較

鳥類の重要種の経年確認状況を表3.7に示す。

鳥類の重要種は、これまでの調査で13種が確認されている。調査年度別に見ると、1981年度は5種、1994年度は9種確認されたが、2004年度では確認されず、今回調査では8種が確認された。今回初めて記録された種は、アカアシシギのみであった。また過去に記録のある種のうち、ヨシゴイ、チュウサギ、チュウヒ、キジ、及びタゲリの5種は今回の調査では確認されなかった。

表 3.7 重要種の経年確認状況（鳥類）

番号	目名	科名	種名	環境省 RL	東京都 RDB	文献A		文献B	今回
						1981	1994	2004	2009
1	カイツブリ	カイツブリ	カンムリカイツブリ		C		○		○
2	コウノトリ	サギ	ヨシゴイ	NT	B		○		
3			ダイサギ		C	○	○		○
4			チュウサギ		NT	C	○		
5	タカ	タカ	トビ		C	○			○
6			チュウヒ		EN	B		○	
7		ハヤブサ	チョウゲンボウ		C		○		○
8	キジ	キジ	キジ		B		○		
9	チドリ	チドリ	タゲリ		C		○		
10		シギ	アカアシシギ	VU					○
11		セイタカシギ	セイタカシギ	VU	C		○		○
12		カモメ	コアジサシ	VU	C	○	○		○
13	スズメ	ウグイス	ウグイス		C	○			○
種数						5	9	0	8

3.3.3 外来種の経年確認状況の比較

鳥類調査では、過去に特定外来種及び要注意外来生物は確認されていない。

3.4 哺乳類・爬虫類・両生類

3.4.1 引用文献

哺乳類・爬虫類・両生類は以下の既往調査結果から、重要種及び外来種の経年確認状況を取りまとめた。なお、大田区自然環境保全基礎調査では哺乳類・爬虫類・両生類を対象とした調査は実施されていない。

表 3.8 引用文献（哺乳類・爬虫類・両生類）

文献	既往調査名	調査年度	調査季節	調査範囲	抜粋した地点	確認種数
A	「平成 14 年度 多摩川水系河川水辺の国勢調査」 (京浜河川事務所：平成 15 年)	2002	春、夏、秋	多摩川 (京浜河川事務所管理区間)	大師橋下流地点	4

3.4.2 重要種の経年確認状況の比較

哺乳類・爬虫類・両生類調査での重要種の経年確認状況を表 3.9に示す。

哺乳類・爬虫類・両生類の重要種は、今回確認されたアオダイショウのみが確認されている。

表 3.9 重要種の経年確認状況（哺乳類・爬虫類・両生類）

番号	科名	種名	環境省 RL	東京都 RDB	文献A	今回
					1992	2009
1	ヘビ	アオダイショウ		B		●
種数					0	1

3.4.3 外来種の経年確認状況の比較

哺乳類・爬虫類・両生類調査での外来種の経年確認状況を表 3.10に示す。

哺乳類・爬虫類・両生類の外来種は、今回確認されたミシシippアカミミガメのみが確認されている。

表 3.10 外来種の経年確認状況（哺乳類・爬虫類・両生類）

番号	科名	種名	カテゴリー※	文献A	今回
				1992	2009
1	イシガメ	ミシシippアカミミガメ	(1)		●
種数				0	1

※カテゴリー詳細は表 2.23 を参照

3.5 水生生物

3.5.1 引用文献

水生生物調査では以下の既往調査との比較を行った。

表 3.11 引用文献（水生生物）

文献	既往調査名	調査年度	調査季節	調査範囲	抜粋した地点	確認種数
A	「大田区の水生生物－大田区自然環境保全基礎調査報告書－」 (大田区：昭和 60 年)	1983	魚類－5 月、7 月、2 月 底生生物－不明	大田区内全域の河川	六郷橋 大師橋	31
B	「河川生物調査（魚介類） 多摩川」 (京浜河川事務所：平成 14 年)	2001	春、秋	多摩川 (京浜河川事務所 管理区間)	河口 大師橋	19
C	「H13 年度河川生物調査（多摩川底生動物）」 (京浜河川事務所：平成 14 年)	2001	夏、冬、初春	多摩川 (京浜河川事務所 管理区間)	河口 大師橋	127

3.5.2 重要種の経年確認状況の比較

水生生物調査での重要種の経年確認状況を表 3.9に示す。

水生生物の重要種は、これまでの調査で魚類 11 種、底生生物 2 種の計 13 種が確認されている。調査年度別に見ると、1983 年度には 8 種、2001 年度では 2 種、今回調査では 9 種が確認された。今回初めて記録された種は、ウナギ、マルタ、トビハゼ、ヌマチチブの 4 種であった。また、過去に記録がある種のうち、メナダ、エドハゼ、チチブ、カワグチツボの 4 種は確認されなかった。

表 3.12 重要種の経年確認状況（水生生物）

番号	目名	科名	種名	環境省	東京都	文献A	文献B・C	今回
				RL	RDB	1983	2001	2009
1	ウナギ	ウナギ	ウナギ	DD	B			●
2	コイ	コイ	マルタ		C			●
3	スズキ	ボラ ハゼ	メナダ		B	●		
4			トビハゼ	NT	A			●
5			エドハゼ	VU	A	●		
6			ビリンゴ		B	●		●
7			アシシロハゼ	C	C	●		●
8			マサゴハゼ	C	C	●		●
9			アベハゼ	C	C	●		●
10			ヌマチチブ	C	C			●
11			チチブ	C	C	●		
12			盤足	カワグチツボ	カワグチツボ	NT		
13	マルスダレガイ	シジミ	ヤマトシジミ	NT		●	●	●
種数						8	2	9

3.5.3 外来種の経年確認状況の比較

水生生物調査での外来種の経年確認状況を表 3.10に示す。

水生生物の外来種は、過去 3 回の調査で 7 種が確認されている。調査年別に見ると、1983 年度の調査では 3 種が種確認され、2001 年度は 6 種、今回調査では 2 種が確認された。

表 3.13 外来種の経年確認状況（水生生物）

番号	目名	科名	種名	カテゴリ※	文献A 1983	文献B・C 2001	今回 2009
1	イガイ	イガイ	ムラサキイガイ	(1)	●	●	
2			ミドリイガイ	(1)		●	
3			コウロエンカワヒバリガイ	(2)		●	●
4	マルスダレガイ	カワホトギス	イガイダマシ	(2)		●	●
5	フジツボ	フジツボ	タテジマフジツボ	(2)	●	●	
6	エビ	アメリカザリガニ	アメリカザリガニ	(1)	●		
7		ワタリガニ	チチュウカイミドリガニ	(2)		●	
種数					3	6	2

※カテゴリ詳細は表 2.36 を参照

4. まとめ

項目別の調査結果を環境類型別にとりまとめ、それぞれの環境の特徴を述べる。

4.1 公園

公園に類型分けした3つの地点のうち、萩中公園と、河川敷の大師橋緑地及び六郷橋緑地は地理的に隔離されており、調査結果も異なる事から別々にとりまとめた。

4.1.1 萩中公園

萩中公園の調査結果概要を表4.1に示す。

萩中公園は、多くの遊具や、交通公園、野球場などの施設がある一方で、水路や木漏れ日の下を歩けるような小路が整備されており、区民の憩いの場として親しまれている。

公園内で目立つ植物はそのほとんどが植栽であり、ヒマラヤスギやエノキといった大木や、サザンカ、アジサイなどの花樹など63種が植栽されていた。自生している植物として確認されたのは、ツメクサ、カタバミ、ホトケノザ、ウラジロチチコグサ、ヒメジョオンなどグラウンドや花壇の雑草植物がほとんどであり、アオキなど栽培されていたものが逸出した植物を含め105種であった。また重要種であるシロヤマブキ、シランが植栽され、ミノボロが自生していた。そのような人工的な環境ではあるが、植樹が多いためか昆虫類の確認は少なくなく、主なものでバッタ類はツマグロバッタなど3種、アブラゼミや、重要種のクマゼミなどのセミ類を含むカメムシ類は8種、蝶類はナミアゲハなど9種が確認され、昆虫類全体で52種が確認された。また鳥類も、キジバト、ヒヨドリ、スズメ、オナガ、ハシボソガラスなど街中に多い種を中心に17種が確認され、重要種であるウグイスが秋季に確認された。両生類・爬虫類・哺乳類では、公園という非常に人間に近い環境のためほとんど確認されず、アズマヒキガエル1種のみが確認された。陸産貝類や土壌生物は、手入れの行き届いた環境のため、湿った落ち葉や放置された倒木などの陸産貝類や土壌生物が好む環境が少なかったこともあり、ミジンマイマイやオナジマイマイなどの乾燥に比較的強い種を中心に6種のみ、土壌生物は確認されなかった。

本公園は区民が自然と親しむという目的に適しているとは言い難いが、住宅街にあり、区民が利用しやすい立地であるので、今後北西部の小路周辺をより自然に近い状態に近づけることで、あまり遠出のできないお年寄りが自然と親しむことのできる公園として期待することができるのではないかと思われた。

表 4.1 地点別調査結果概要（萩中公園）

<p>地点写真</p>					
<p>地点概要</p>	<p>多くの遊具や、交通公園、野球場などの施設がある一方で、水路や木漏れ日の下を歩けるような小路が整備されており、区民の憩いの場として親しまれている。</p>				
<p>調査結果</p>	<p>項目</p>	<p>種数</p>	<p>主な確認種*</p>	<p>重要種</p>	<p>外来種</p>
	<p>植物</p>	<p>105</p>	<p>ヒマラヤスギ、コナラ、エノキ、サザンカ、サルスベリ、アジサイ、ツメクサ、シロツメクサ、カタバミ、ホトケノザ、ヨモギ、ウラジロチチコグサ、ヒメジョオン、ツタ、アオキ</p>	<p>シロヤマブキ、シラン、ミノボロ</p>	<p>ハリエンジュ、オオアレチノギク、ヒメムカシヨモギ、セイヨウタンポポなど10種</p>
	<p>昆虫類</p>	<p>52</p>	<p>ツマグロバツタ アブラゼミ、 ナミアゲハ</p>	<p>クマゼミ</p>	<p>-</p>
	<p>鳥類</p>	<p>17</p>	<p>キジバト、ヒヨドリ、スズメ、オナガ ハシボソガラス</p>	<p>ウグイス</p>	<p>-</p>
	<p>哺乳・爬虫・両</p>	<p>1</p>	<p>アズマヒキガエル</p>	<p>-</p>	<p>-</p>
	<p>陸産貝類</p>	<p>6</p>	<p>ミジンマイマイ、 オナジマイマイ</p>	<p>-</p>	<p>-</p>
<p>土壌生物</p>	<p>0</p>	<p>-</p>	<p>-</p>	<p>-</p>	
<p>評価・提言</p>	<p>本公園は区民が自然と親しむという目的に適しているとはいえないが、住宅街にあり、区民が利用しやすい立地であるので、今後北西部の小路周辺をより自然に近い状態に近づけることで、あまり遠出のできないお年寄りが自然と親しむことのできる公園として期待することができるのではないかと考えられた。</p>				

※優占種、本地点の環境に特徴的な種、一般の人々にもなじみのある種などを挙げた。

4.1.2 大師橋緑地及び六郷橋緑地

大師橋緑地及び六郷橋緑地は、多摩川の左岸側河川敷に広がる緑地であり、大部分は芝生の草原とグラウンドである。従って、確認された植物は、シロツメグサやナズナ、オオバコなどの踏みつけに強い陽当たりの良い場所に生育する種がほとんどであり、カアロリナアオイゴケ等のグラウンドプランツ由来の外来種や、本来は海浜性の外来種であるオオフトバムグラ等も多く見られ、出現種は両地点合わせて 102 種であった。なお、特定外来生物のアレチウリ、オオカワヂシャが六郷橋緑地では確認された。

常に人間がいる環境であり、隠れ場となる茂みや樹林も少ないため、確認された昆虫類は少なく、ショウリョウバッタ、モンキチョウ、ニホンミツバチなど 23 種にとどまった。

鳥類は、萩中公園でも確認された街中に多い種に加え、草地で採餌をするツグミや、干潟に生息する水鳥のカルガモ、オナガガモ、オオバン、移行帯のヨシ原に営巣するセッカなど、隣接する環境に依存する種が確認され、重要種のトビ、チョウゲンボウなども含め両地点合わせて 20 種が確認された。

両生類・爬虫類・哺乳類では、緑地の周辺の至る所にモグラ属の坑道が確認され、六郷橋緑地で春にドブネズミの死体が確認された。

また陸産貝類や土壌生物は、植栽樹の落ち葉の下や、J R 東海道線の橋脚まわりの茂みなどで、オナジマイマイや重要種のナガオカモノアラガイなど陸産貝類 9 種、オカダンゴムシなど土壌生物 3 種が確認された。

この両地点は、緑地部分には決して生物は多くないが、周辺の移行帯や干潟に近づきやすく、そこに生息する生物を観察するのに適していると思われた。スポーツなどの目的で利用している区民が、自然や生物にも目を向けられるように、周辺に生息する生物を詳しく紹介した看板などを設置することで、環境学習に寄与する事ができるのではないかと考えられた。

表 4.2 地点別調査結果概要（大師橋緑地及び六郷橋緑地）

<p style="writing-mode: vertical-rl;">地点写真</p>																																																																								
<p style="writing-mode: vertical-rl;">地点概要</p>	<p>多摩川の左岸側河川敷に整備された緑地公園であり、大部分は芝生の草原と野球場などのグラウンドである。休日にはランニングや野球といったスポーツで楽しむ人々が大勢訪れる。</p>																																																																							
<p style="writing-mode: vertical-rl;">調査結果</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>種数</th> <th>主な確認種※</th> <th>重要種</th> <th>外来種</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>植物</td> <td>102</td> <td>シロツメクサ、ナズナ、オオバコ、カリナアオイゴケ、オオフタバムグラ</td> <td>-</td> <td>アレチウリ、オオカワヂシャなど13種</td> </tr> <tr> <td>昆虫類</td> <td>23</td> <td>ショウリョウバッタ、モンキチョウ、ニホンミツバチ</td> <td></td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>鳥類</td> <td>20</td> <td>カルガモ、コガモ、オオバン、キジバト、ヒヨドリ、ツグミ、セッカ</td> <td>トビ、チョウゲンボウ</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>哺乳・爬虫・両</td> <td>2</td> <td>モグラ属の一種（坑道） ドブネズミ</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>陸産貝類</td> <td>9</td> <td>ウスカワマイマイ オナジマイマイ</td> <td>ナガオカモノアラガイ</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>土壌生物</td> <td>3</td> <td>オカダンゴムシ、 ワラジムシ</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>	項目	種数	主な確認種※	重要種	外来種	植物	102	シロツメクサ、ナズナ、オオバコ、カリナアオイゴケ、オオフタバムグラ	-	アレチウリ、オオカワヂシャなど13種	昆虫類	23	ショウリョウバッタ、モンキチョウ、ニホンミツバチ		-	鳥類	20	カルガモ、コガモ、オオバン、キジバト、ヒヨドリ、ツグミ、セッカ	トビ、チョウゲンボウ	-	哺乳・爬虫・両	2	モグラ属の一種（坑道） ドブネズミ	-	-	陸産貝類	9	ウスカワマイマイ オナジマイマイ	ナガオカモノアラガイ	-	土壌生物	3	オカダンゴムシ、 ワラジムシ	-	-	<table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>種数</th> <th>主な確認種※</th> <th>重要種</th> <th>外来種</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>植物</td> <td>102</td> <td>シロツメクサ、ナズナ、オオバコ、カリナアオイゴケ、オオフタバムグラ</td> <td>-</td> <td>アレチウリ、オオカワヂシャなど13種</td> </tr> <tr> <td>昆虫類</td> <td>23</td> <td>ショウリョウバッタ、モンキチョウ、ニホンミツバチ</td> <td></td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>鳥類</td> <td>20</td> <td>カルガモ、コガモ、オオバン、キジバト、ヒヨドリ、ツグミ、セッカ</td> <td>トビ、チョウゲンボウ</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>哺乳・爬虫・両</td> <td>2</td> <td>モグラ属の一種（坑道） ドブネズミ</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>陸産貝類</td> <td>9</td> <td>ウスカワマイマイ オナジマイマイ</td> <td>ナガオカモノアラガイ</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>土壌生物</td> <td>3</td> <td>オカダンゴムシ、 ワラジムシ</td> <td>-</td> <td>-</td> </tr> </tbody> </table>	項目	種数	主な確認種※	重要種	外来種	植物	102	シロツメクサ、ナズナ、オオバコ、カリナアオイゴケ、オオフタバムグラ	-	アレチウリ、オオカワヂシャなど13種	昆虫類	23	ショウリョウバッタ、モンキチョウ、ニホンミツバチ		-	鳥類	20	カルガモ、コガモ、オオバン、キジバト、ヒヨドリ、ツグミ、セッカ	トビ、チョウゲンボウ	-	哺乳・爬虫・両	2	モグラ属の一種（坑道） ドブネズミ	-	-	陸産貝類	9	ウスカワマイマイ オナジマイマイ	ナガオカモノアラガイ	-	土壌生物	3	オカダンゴムシ、 ワラジムシ	-	-
項目	種数	主な確認種※	重要種	外来種																																																																				
植物	102	シロツメクサ、ナズナ、オオバコ、カリナアオイゴケ、オオフタバムグラ	-	アレチウリ、オオカワヂシャなど13種																																																																				
昆虫類	23	ショウリョウバッタ、モンキチョウ、ニホンミツバチ		-																																																																				
鳥類	20	カルガモ、コガモ、オオバン、キジバト、ヒヨドリ、ツグミ、セッカ	トビ、チョウゲンボウ	-																																																																				
哺乳・爬虫・両	2	モグラ属の一種（坑道） ドブネズミ	-	-																																																																				
陸産貝類	9	ウスカワマイマイ オナジマイマイ	ナガオカモノアラガイ	-																																																																				
土壌生物	3	オカダンゴムシ、 ワラジムシ	-	-																																																																				
項目	種数	主な確認種※	重要種	外来種																																																																				
植物	102	シロツメクサ、ナズナ、オオバコ、カリナアオイゴケ、オオフタバムグラ	-	アレチウリ、オオカワヂシャなど13種																																																																				
昆虫類	23	ショウリョウバッタ、モンキチョウ、ニホンミツバチ		-																																																																				
鳥類	20	カルガモ、コガモ、オオバン、キジバト、ヒヨドリ、ツグミ、セッカ	トビ、チョウゲンボウ	-																																																																				
哺乳・爬虫・両	2	モグラ属の一種（坑道） ドブネズミ	-	-																																																																				
陸産貝類	9	ウスカワマイマイ オナジマイマイ	ナガオカモノアラガイ	-																																																																				
土壌生物	3	オカダンゴムシ、 ワラジムシ	-	-																																																																				
<p style="writing-mode: vertical-rl;">評価・提言</p>	<p>緑地部分には決して生物は多くないが、周辺の移行帯や干潟に近づきやすく、そこに生息する生物を観察するのに適していると思われた。スポーツなどの目的で利用している区民が、自然や生物にも目を向けられるように、周辺に生息する生物を詳しく紹介した看板などを設置することで、環境学習に寄与する事ができるのではないかと考えられた。</p>																																																																							

※優占種、本地点の環境に特徴的な種、一般の人々にもなじみのある種などを挙げた。

4.2 樹林帯

樹林帯は、大師橋の上流側から約 200m 続く河畔林であり、要注意外来生物であるトウネズミモチを中心に、エノキ、アキニレ、ケヤキなどの逸出した高木で構成され、やや人為的な影響を受けていた。その他オニグルミ、シロダモ、アカメガシワといった木本類や、スイバ、メドハギなどの草本類など 89 種の植物が確認され、重要種はミノボロ 1 種が確認された。なお、特定外来生物のアレチウリも確認されている。

樹林内は定常的に人間の立ち入りがあるためか、動物の確認は少なく、ジョロウグモ、ショウリョウバッタなど 29 種が認められ、鳥類は街中で多い種に、ヒヨドリ、カワラヒワなど樹林性の種を加えて 13 種、両生類・爬虫類・哺乳類ではカナヘビ 1 種のみが確認された。また、陸産貝類では当該地点は河口域の河畔林であるため、海辺近くに生息する重要種のスナガイが確認され、他に重要種のアラガイなど 14 種が確認された。

土壌生物では、樹木によって直射日光が遮られ乾燥しにくいいためか、クロベンケイガニ、アカテガニなどのカニ類やヒメハマトビムシなど、水辺と陸上の境目に生息する甲殻類やオカダンゴムシ、ワラジムシなどの一般的な種を中心に 10 種が確認された。

本地点を構成している高木はほとんどが帰化種であり、都市部を流れる多摩川の現状を反映していると思われた。外から見た印象とは違い、樹林内は意外と明るく下草が少ない印象を受けた。人の立ち入りがあるため、下草が生育しにくい環境である可能性が高い。また、利用者の投げ捨てや上流から流れてきたと思われるゴミが目立った。人が立ち入らなければ生物も増えることが予想された。

表 4.3 地点別調査結果概要（樹林帯）

<p>地点写真</p>					
<p>地点概要</p>	<p>大師橋の上流側から約 200m 続く河畔林であり、樹林と護岸の間は大師橋緑地から河口の干潟へ向かう道になっている。</p>				
<p>調査結果</p>	<p>項目</p>	<p>種数</p>	<p>主な確認種※</p>	<p>重要種</p>	<p>外来種</p>
<p>植物</p>	<p>89</p>	<p>トウネズミモチ、 エノキ、アキニレ、 ケヤキ、オニグルミ、 シロダモ、 アカメガシワ、 スイバ、メドハギ</p>	<p>ミノボロ</p>	<p>アレチウリ、 セイタカアワダチソウ、 ヒメジョオンなど 13 種</p>	
<p>昆虫類</p>	<p>29</p>	<p>ジョロウグモ、 ショウリョウバッタ、</p>	<p>-</p>	<p>-</p>	
<p>鳥類</p>	<p>13</p>	<p>キジバト、スズメ、 ヒヨドリ、カワラヒワ</p>	<p>-</p>	<p>-</p>	
<p>哺乳・爬虫・両</p>	<p>1</p>	<p>カナヘビ</p>	<p>-</p>	<p>-</p>	
<p>陸産貝類</p>	<p>9</p>	<p>ウスカワマイマイ オナジマイマイ</p>	<p>ナガオカモノアラガイ、 スナガイ</p>	<p>-</p>	
<p>土壌生物</p>	<p>10</p>	<p>オカダンゴムシ、 エアタジムシ、 クロベンケイガニ、 アカテガニ、 ヒメハマトビムシ</p>	<p>-</p>	<p>-</p>	
<p>評価・提言</p>	<p>本地点を構成している高木はほとんどが帰化種であり、都市部を流れる多摩川の現状を反映していると思われた。外から見た印象とは違い、樹林内は意外と明るく下草が少ない印象を受けた。人の立ち入りがあるため、下草が生育しにくい環境である可能性が高い。また、利用者の投げ捨てや上流から流れてきたと思われるゴミが目立った。人が立ち入らなければ生物も増えることが予想された。</p>				

※優占種、本地点の環境に特徴的な種、一般の人々にもなじみのある種などを挙げた。

4.3 移行帯（下流部、上流部）

移行帯は、多摩川と公園緑地の間に挟まれたヨシ群落を中心とした自然草原であり、陸上の調査範囲のなかでは人為的な改変が最も少ない環境である。確認された植物は両地点合わせて 166 種であり、ヨシ以外にもオギ、ススキなどのイネ科植物が多く、下流部では重要種のみノゴメ、ミノボロ、アイアシも確認された。上流部にはオニグルミやタチヤナギなどの木本類の生育が一部で見られ、キヅタやツルウメモドキなどのつる性木本類も確認された。また重要種は他に、上流部でカワヂシャが確認された。なお、特定外来種のアレチウリが両地点で、オオカワヂシャ及びオオキンケイギクが上流部で確認された。

昆虫類に関しては、人間が立ち入れない部分が多く、隠れ場所となる茂みも多いためか、確認種数も両地点合わせて 79 種と多く、重要種のアオモンイトトンボやクロスジギンヤンマなどのトンボ類や、トビイロハゴロモ、ツマグロオオヨコバイなどのカメムシ類、トウキョウヒメハンミョウやマメコガネなどの甲虫類が確認された。なお、鳥類は、セッカ、オオヨシキリなど茂みに営巣する種や、アオジ、カワラヒワ、重要種のウグイスなどの樹林性の種、コサギ、オナガガモ、イソシギ、ハクセキレイといった水辺に多い種など 21 種が確認された。両生類・爬虫類・哺乳類は、カナヘビ及び重要種のアオダイショウの 2 種が確認された。

また本環境は、今回の調査環境の中で陸産貝類の生息環境が最も多く、ヨシや散在するクコなどの木本の根元、土壌の上に放置されたゴミの下などで、重要種のカガオカモノアラガイ、スナガイの他に、ミジンマイマイ、チャコウラナメクジ、オカチョウジガイ、マルシタラガイ、ウスカワマイマイ、オナジマイマイなどが 22 種と多く確認された。

土壌生物は、クロベンケイガニ、アシハラガニなどの陸生のカニ類を中心に、石の下からはアカムカデ属の一種や、ワラジムシ、ナミザトウムシなど 12 種が確認された。

本地点は、人の背丈を超える高さのヨシが繁茂し、生物の格好の隠れ場となる。また、干潟から続く移行帯までの部分は、水域と陸域の中間点にあたり、生態学的にはエコトーンと呼ばれ、水深や土壌の水分状態が次第に変化していくため、様々な生物が生息し、多様な生態系を作り出している。昆虫のトンボ類や陸生のカニ類などはその典型であり、幼生期は水中で成長し、成体は陸上で生活するため、本地点のようなエコトーン帯に特徴的な生物といえる。今回の調査は各季節 1 回の目視調査中心であったにもかかわらず多くの生物が確認されたことから、本地点が生物にとって住みやすい環境であろう事が示唆された。今後もこのまま自然の姿を残した状態で管理していく事が重要であると考えられた。

表 4.4 地点別調査結果概要（移行帯）

地点写真					
	<p>多摩川と公園緑地の間に挟まれたヨシ群落を中心とした自然草原であり、陸上の調査範囲のなかでは人為的な改変が最も少ない環境である。</p>				
概要	<p>多摩川と公園緑地の間に挟まれたヨシ群落を中心とした自然草原であり、陸上の調査範囲のなかでは人為的な改変が最も少ない環境である。</p>				
調査結果	項目	種数	主な確認種※	重要種	外来種
	植物	166	オニグルミ、タチヤナギ、ツルウメモドキ、キツタ、オギ、ススキ、ヨシ、	カワヂシャ、ミノゴメ、ミノボロ、アイアシ、	アレチウリ、オオカワヂシャ、オオキンケイギクなど 21 種
	昆虫類	79	トビイロハゴロモ、ツマグロオオヨコバイ、トウキョウヒメハンミョウ、マメコガネ	アオモンイトトンボ、クロスジギンヤンマ	-
	鳥類	21	コサギ、オナガガモ、イソシギ、カワラヒワ、セッカ、オオヨシキリ、アオジ、	ウグイス	-
	哺乳・爬虫・両	2	カナヘビ	アオダイショウ	-
	陸産貝類	22	ミジンマイマイ、チャコウラナメクジ、オカチョウジガイ、マルシタラガイ、ウスカワマイマイ、オナジマイマイ	ナガオカモノアラガイ、スナガイ	-
土壌生物	12	オカダンゴムシ、ワラジムシ、クロベンケイガニ、アシハラガニ、アカムカデ属の一種、ワラジムシ、ナミザトウムシ	-	-	
評価・提言	<p>本地点は、人の背丈を超える高さのヨシが繁茂し、生物の格好の隠れ場となる。また、干潟から続く移行帯までの部分は、水域と陸域の中間点にあたり、生態学的にはエコトーンと呼ばれ、水深や土壌の水分状態が次第に変化していくため、様々な生物が生息し、多様な生態系を作り出している。昆虫のトンボ類や陸生のカニ類などはその典型であり、幼生期は水中で成長し、成体は陸上で生活するため、本地点のようなエコトーン帯に特徴的な生物といえる。今回の調査は各季節 1 回の目視調査中心であったにもかかわらず多くの生物が確認されたことから、本地点が生物にとって住みやすい環境であろう事が示唆された。今後もこのまま自然の姿を残した状態で管理していく事が重要であると考えられた。</p>				

※優占種、本地点の環境に特徴的な種、一般の人々にもなじみのある種などを挙げた。

4.4 干潟植生有（下流部、上流部）

本環境は、潮汐の影響を受け、植物の根元が水に浸かる環境となっている塩性湿地である。ヨシ群落がほとんどであるが、イ、アイアシ、ガマ、シオクグ、エゾウキヤガラ、などの抽水植物が群落を形成し、下流部と上流部を合わせて 17 種が確認された。なお、シオクグ、エゾウキヤガラは東京都 RDB で C ランクに指定されている。

鳥類に関しては、移行帯から続くヨシ帯があるため、ハクセキレイ、オオヨシキリ、スズメ、ムクドリなどの陸鳥も確認されているが、確認種のほとんどが水鳥であり、両地点合わせて 36 種が確認された。水鳥の確認種は、後述の干潟植生無と一体の環境であると考えられる事から、ここでは割愛する。なお、重要種のトビやチョウゲンボウも上空を旋回していた。

水生生物は、魚類ではボラが多く確認されたほか、マサゴハゼ、アベハゼ、ヌマチチブといったハゼ科の重要種が多かった。底生生物では、カワザンショウガイ類、サカマキガイ、重要種のヤマトシジミなどの貝類や、シラタエビ、クロベンケイガニ、アシハラガニなどの甲殻類が確認された。水生生物は魚類、底生生物を合わせ 34 種が確認された。

本地点は抽水植物の中でも、シオクグやアイアシといった汽水域にのみ生育する植物が見られる貴重な環境である。これらの植物の隙間は大型の魚類や水鳥が入りにくいため、多くの小型魚類が隠れ場として利用している。こういった植生を保全する事により、汽水域の貴重な生態系の保全に繋がる事が予想された。

表 4.5 地点別調査結果概要（干潟植生有）

<p>地点写真</p>					
<p>地点概要</p>	<p>本環境は、潮汐の影響を受け、植物の根元が水に浸かる環境となっている塩性湿地である。塩性湿地に特異的な植物群落が形成されていた。</p>				
<p>調査結果</p>	<p>項目</p>	<p>種数</p>	<p>主な確認種※</p>	<p>重要種</p>	<p>外来種</p>
<p>植物</p>	<p>17</p>	<p>イ、ヨシ、ガマ</p>	<p>シオクグ、 エゾウキヤガラ</p>	<p>アレチウリ</p>	
<p>鳥類</p>	<p>36</p>	<p>コサギ、カルガモ、コガモ、 オオバン、ハクセキレイ、 オオヨシキリ、スズメ、ムクドリ</p>	<p>トビ、チョウゲンボウ</p>	<p>-</p>	
<p>水生生物</p>	<p>34</p>	<p>コイ、オイカワ、スズキ、 ボラ、カワザンショウガイ類、 サカマキガイ、ヒメハマトビムシ、 キタフナムシ、シラタエビ、 クロベンケイガニ、アシハラガニ</p>	<p>ビリンゴ、アシシロハゼ、 マサゴハゼ、アベハゼ、 ヌマチチブ、ヤマトシジミ</p>	<p>-</p>	
<p>評価・提言</p>	<p>本地点は抽水植物の中でも、シオクグやアイアシといった汽水域にのみ生育する植物が見られる貴重な環境である。これらの植物の隙間は大型の魚類や水鳥が入りにくいため、多くの小型魚類が隠れ場として利用している。こういった植生を保全する事により、汽水域の貴重な生態系の保全に繋がる事が予想された。</p>				

※優占種、本地点の環境に特徴的な種、一般の人々にもなじみのある種などを挙げた。

4.5 干潟植生無（下流部、上流部）


本環境は、多摩川を運ばれてきた土砂が堆積してできた干潟である。

鳥類は、重要種のダイサギなどのサギ類や、カワウ、カルガモ、オオセグロカモメ、ウミネコなどは周年確認されたが、春、秋の渡りの時期には重要種のアカアシシギなどのシギチ類、冬はマガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、スズガモなどのカモ類や、ユリカモメなどの冬鳥が越冬のために多く訪れているのが確認され、全体で30種が確認された。

また水生生物は、魚類では干潟植生有の環境でも確認されたハゼ類に加え、下流部では重要種のとびハゼが確認され、その他にも遊泳性のマルタ、クロダイ、ボラなどが確認された。底生生物では、求愛ダンスをするチゴガニやヤマトオサガニの姿が目立ち、砂を掘るとヤマトシジミやゴカイ類が、石をめくるとタカノケフサイソガニなどが多く生息しており、魚類、底生動物合わせて46種が確認された。その他には、要注意外来生物に指定されているミシシippアカミミガメ、コウロエンカワヒバリガイ、イガイダマシが確認された。

下流の干潟ではヤマトシジミを採る人々も多く見られ、上流部の干潟ではバードウォッチングに訪れる人々も多く見られた。このように現在も多くの人々に親しまれている干潟だが、ダンスを踊るカニ類や、砂を掘るとゴカイ類を始めとする多くの生物が生息している事はあまり知られていないため、今後はそういった生物にスポットをあてることで、効果的な環境学習などに応用出来るのではないかと考えられた。

表 4.6 地点別調査結果概要（干潟植生無）

<p>地点写真</p>																						
<p>地点概要</p>	<p>本環境は、多摩川を運ばれてきた土砂が堆積してできた干潟である。抽水植物は生育していないが、水鳥や魚類の稚仔魚、汽水性の底生動物などが多く生息し、多様な生物相を創出している。</p>																					
<p>調査結果</p>	<table border="1"> <thead> <tr> <th>項目</th> <th>種数</th> <th>主な確認種*</th> <th>重要種</th> <th>外来種</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>鳥類</td> <td>30</td> <td>カルガモ、オオセグロカモメ、ウミネコ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、スズガモ</td> <td>カンムリカイツブリ、ダイサギ、コアジサシ、セイタカシギ</td> <td>-</td> </tr> <tr> <td>哺乳・爬虫・両</td> <td>1</td> <td>-</td> <td>-</td> <td>ミシシippiaアカミミガメ</td> </tr> <tr> <td>水生生物</td> <td>46</td> <td>マルタ、クロダイ、ボラ、マハゼ、ゴカイ類、チゴガニ、ヤマトオサガニ、タカノケフサイソガニ</td> <td>ウナギ、マルタ、トビハゼ、ビリンゴ、マサゴハゼ、アベハゼ、ヌマチチブ、ヤマトシジミ</td> <td>コウロエンカワヒバリガイ、イガイダマシ</td> </tr> </tbody> </table>	項目	種数	主な確認種*	重要種	外来種	鳥類	30	カルガモ、オオセグロカモメ、ウミネコ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、スズガモ	カンムリカイツブリ、ダイサギ、コアジサシ、セイタカシギ	-	哺乳・爬虫・両	1	-	-	ミシシippiaアカミミガメ	水生生物	46	マルタ、クロダイ、ボラ、マハゼ、ゴカイ類、チゴガニ、ヤマトオサガニ、タカノケフサイソガニ	ウナギ、マルタ、トビハゼ、ビリンゴ、マサゴハゼ、アベハゼ、ヌマチチブ、ヤマトシジミ	コウロエンカワヒバリガイ、イガイダマシ	<p>下流の干潟では一時期減少していたが、近年増えてきたヤマトシジミを採る人々も多く見られ、上流部の干潟ではバードウォッチングに訪れる人々も多く見られた。このように現在も多くの人々に親しまれている干潟だが、ダンスを踊るカニ類や、砂を掘るとゴカイ類を始めとする多くの生物が生息している事はあまり知られていないため、今後はそういった生物にスポットをあてることで、効果的な環境学習などに応用出来るのではないかと考えられた。</p>
項目	種数	主な確認種*	重要種	外来種																		
鳥類	30	カルガモ、オオセグロカモメ、ウミネコ、マガモ、コガモ、ヒドリガモ、オナガガモ、スズガモ	カンムリカイツブリ、ダイサギ、コアジサシ、セイタカシギ	-																		
哺乳・爬虫・両	1	-	-	ミシシippiaアカミミガメ																		
水生生物	46	マルタ、クロダイ、ボラ、マハゼ、ゴカイ類、チゴガニ、ヤマトオサガニ、タカノケフサイソガニ	ウナギ、マルタ、トビハゼ、ビリンゴ、マサゴハゼ、アベハゼ、ヌマチチブ、ヤマトシジミ	コウロエンカワヒバリガイ、イガイダマシ																		
<p>評価・提言</p>	<p>※優占種、本地点の環境に特徴的な種、一般の人々にもなじみのある種などを挙げた。</p>																					